

平成24年度(2012年度)事業報告書

アジアの町並み保存ネットワークとその未来

—歴史遺産、民族アイデンティティの継承、アジアのダイナミズム—

2013年10月

社団法人 奈良まちづくりセンター

はじめに

(社) 奈良まちづくりセンターは1991年からアジアの町並み保存を支援し、アジアのNPOのネットワーク化に取り組んできましたが、今年度は、(公益財団法人) トヨタ財団のアジア隣人プログラムの助成を受け、「アジアの町並み保存ネットワークとその未来—歴史遺産、民族アイデンティティの継承、アジアのダイナミズム—」を実施しました。この事業では、2012年11月22日~25日にミャンマーを予備調査した後、マレーシア・ペナンにおいて2013年1月12日~14日の3日間、ペナン・ヘリテージ・トラスト(PHT)とレスタリ・ヘリテージ・ネットワークの協力を得て国際会議を開催しました。

国際会議は、マレーシア、ミャンマー、カンボジア、タイ、インドネシア、韓国、中国、台湾、日本の9カ国・地域から20グループ、約120人の参加がありました。詳細は本編を読んでいただくとして、私は初日のウェルカム・パーティで、英語で次のような内容の挨拶をしました。

「私たちの組織は1979年に設立され、1991年に初めてPHTを訪問しました。そのときから、私たちはアジアの歴史的町並み保存国際運動のネットワークの一員となり、メンバー間の交流を通して、相互の経験から多くを学ぶことができました。20年以上たった今、私たちはネットワークを維持し発展させるための新たな戦略を必要としています。私たちはアジアの友人すべてとの再会を望んでいます。アジア全体を通じた強力なネットワークを作らねばなりません。そのため、最終日に予定しているペナン宣言が、アジアの町並み保存に新たな展開をもたらす第一歩となることを望んでいます。私は、私たちの未来の活動のために、このシンポジウムが成功することを願っています。」

基調講演をしていただいた宗田好史京都府立大学教授は「世界文化遺産の保全4分野における新しい潮流」として、単に残った遺産ではなくそれらを支えてきたコミュニティこそが重要であり、文化遺産の保全が住民が主体となって広がりつつあると述べられました。また、各国のNPO・NGOからもそれぞれの伝統的な町並み保全の現状と苦勞が熱く語られました。

今後のアジアの町並み保存の方向性を確認するペナン宣言については、国によってはNGOなどの市民活動に対し政府が厳しいこともあって採択には至りませんでした。趣旨には皆さんが賛同され、新たなネットワークとしてアジア・ヘリテージ・ネットワーク(AHN)を結成し、ITによる情報交換を含めて連携を深めていくことになりました。

会議で最も印象が深かったことは、アジアの女性がすごくパワーフルで、国境を超え、多様性を踏まえて英語で縦横に語り合っていたことでした。この会議を成功裏に終えたことはトヨタ財団、PHTとボランティアの皆さん、ホテルLove Laneほか、支援していただいた方々、そして熱心に討議していただいた参加者の皆さんのおかげであったと、心から熱くお礼を申し上げます。

この報告書は、ペナン国際会議の成果を踏まえ、これまでの活動を総括するとともにアジアの町並み保存の未来を展望するものです。ダイナミックに変貌するアジアの歴史的町並み保存の未来のために、今回の事業が少しでも役に立つことを祈っています。

2013年 10月吉日

(社) 奈良まちづくりセンター
理事長 室 雅博

－ 目 次 －

1. プロジェクトの概要	・・・ 1
2. 奈良まちづくりセンターの国際交流	
－ 1. 交流の歴史	・・・ 3
－ 2. ミャンマー・ヤンゴン訪問	・・・ 5
3. 国際シンポジウム（マレーシア・ペナン）の概要	
－ 1. プログラム	・・・ 8
－ 2. 参加団体	・・・ 10
－ 3. シンポジウム内容	・・・ 11
－ 4. 写真	・・・ 25
4. 国際シンポジウムレポート	
－ 1. 国際シンポジウムの開催報告	・・・ 32
－ 2. 激動のアジアに浸透する「町を守る」共通認識	・・・ 34
5. 未来への展望	
－ 1. アジアの歴史的町並み保存の新たなネットワークに向けて	・・・ 38
－ 2. アジア太平洋地域の文化遺産、文化的アイデンティティ、そしてダイナミズム	・・・ 42
[資料編]	
1. シンポジウム当日資料	・・・ 48
2. ソーシャルネットワークによる発信	・・・ 77
3. 学会論文	・・・ 78
4. 新聞記事	・・・ 83

1. プロジェクトの概要

1) プロジェクトの趣旨

奈良まちづくりセンターは、アジア各地域の民族・歴史・文化（アイデンティティ）の象徴である歴史的町並みを保存するため、1991年にマレーシアのペナンの歴史的町並み保存の支援を始めたのを皮切りに、アジアの町並み保存NPOとの交流を進め、各地のNPOとともにアジア西太平洋都市保存ネットワークを結成した。その後タイのチェンマイや韓国のソウルなどを加えてネットワークを拡大した。2004年12月のインド洋大津波の直後には、最も大きな被害を受けたインドネシアのアチエの歴史的遺産の復興に取り組むNPOの支援も行った。

しかし、こうした努力にもかかわらず、近年のアジアの急速な経済発展の陰で、その歴史的町並みはかつてない危機を迎えている。そのため、これまでの活動を総括するとともに未来を展望し、「アジアのダイナミズムに呼応する新たな保存戦略」を構築する必要がある。ミャンマーなど今後市場経済を導入すると予測される国においては、町並みが破壊される前に保存体制を整える必要があるため、これらの国にもネットワークを拡大する必要がある。

当事業では、アジアの町並み保存ネットワークの拠点であるマレーシアのペナンに、各地のNPOが一堂に会して経験交流を行い、「無形文化財を含む歴史的コミュニティの保全」「民族アイデンティティの継承」という新たな視点から提案を行う。また、ミャンマーに設立された「ヤンゴン・ヘリテージ・トラスト」を特別招待するなど、新興国に対して保存活動支援を行う。さらに、事業の成果のPRとネットワークの強化のために、フェイスブックなどの「ソーシャル・ネットワークを最大限活用」する。

2) 今後のアジアにとっての課題

● 進行する歴史的町並みの破壊とコミュニティの崩壊

アジア経済は今後も中国やインドを中心に成長を続けると予想され、その過程で、数千年にわたって築かれてきたアジアの歴史的町並みは急速に破壊が進む。その歴史的町並みとともに、そこで営まれてきた生活者のコミュニティや無形の生活文化も失われつつある。このアジアのダイナミズムのもとで、それらを保存し継承することが課題である。

● 都市の脱個性化と民族的、文化的アイデンティティの喪失

今やアジアの地方都市まで、都市再開発の波は急速に押し寄せており、それぞれの民族や文化的特徴に彩られていたアジアの都市の脱個性化が進行している。地域ごとの民族的、文化的アイデンティティを回復し、個性豊かな都市空間を再創出することが課題である。

● 地域の資源を活かした自立する経済基盤の確立と雇用の場づくり

グローバル経済の蔓延に対して、今後とも、地域が自身の人材や知恵、技術、風土や環境、歴史や文化などを駆使して自立する経済基盤の確立と、スモールビジネスやコミュニティトレード、持ち寄りマーケット、手づくりプロダクト、伝統職人の活用などのリージョナルな雇用の場を創出・実践することが課題になる。

3) 期待される社会への波及効果

- 市民主体の町並み保存活動のネットワーク強化

地域の状況に精通した市民組織 NPO/NGO が主体となった町並み保存の取り組みがアジア各地で行われており、これらをネットワーク化し、また、ミャンマーのような新興国に広めることにより、アジアにおいて、生活者本位、コミュニティ本位、伝統的空間本位の歴史的町並み保存活動を根づかせることができる。

- 町並みを活用した民族的、文化的アイデンティティの創出

未だに各地で文明の衝突といわれる紛争や対立が続くアジアにおいて、歴史的町並みを活用して、都市空間における民族アイデンティティの回復、文化的アイデンティティの創出を図ることにより、それぞれの民族が互いの違いを尊重しつつ、ひとつの都市空間で共存しあう関係を再構築することができる。開催地ペナンは中国系、マレー系、インド系などの多民族がひとつの町並み内に共存する素晴らしい事例であり、参加グループにモデルを示すことができる。

- 市民ネットワークがつくるアジアの平和的未来

日韓、日中など、アジアの国家間には歴史認識の違いや領土問題など困難な課題が山積しているが、町並み保存を初めとする様々な市民ネットワークの形成と強化が、市民レベルでの交流と理解につながり、政府間の対立緩和ひいてはアジアの平和的未来の構築に寄与する。

2. 奈良まちづくりセンターの国際交流

2-1. 交流の歴史

1) アジアネットワーク形成期

- 1991年 マレーシアのペナンの歴史的町並みであるジョージタウンの保存に携わるペナン・ヘリテージ・トラスト(PHT)との交流を皮切りに、奈良まちづくりセンター(NMC)がアジアの町並み保存の支援プロジェクトを開始
- 1991年 マレーシア、インドネシア、シンガポール、台湾、オーストラリアなどのNPOとともに、アジア西太平洋都市保存ネットワーク(Asia and West Pacific Network for Urban Conservation - AWPNUC)を結成
- 1992年 PHTのメンバーを奈良に招待し、国際フォーラム「アジアの歴史都市とまちづくり」を開催
マレーシア、インドネシア、シンガポール、タイ、台湾の町並み保存の状況を調査
- 1993年 ベトナム、韓国、中国の町並み保存の状況を調査、アジアの都市研究に取り組む研究者も少なかった時代に、ひとつのNPOとしては先駆的な調査
オーストラリアのアデレードでのアジア西太平洋ネットワーク国際会議に出席
- 1994年 ベトナムのハノイでのアジア西太平洋ネットワーク国際会議に出席
- 1995年 奈良でアジア西太平洋ネットワーク国際会議「まちづくり草の根国際シンポジウム in NARA」開催、20ヶ国、200人が参加
- 1996年 インドネシアのジョグジャカルタでのアジア西太平洋ネットワーク国際会議に出席
- 1997年 台湾でのアジア西太平洋ネットワーク国際会議に出席
- 2001年 「フィールドトリップ in ペナン」として、NMCのメンバーがペナンを訪問

2) ネットワーク拡大期

- 2003年 タイのチェンマイの歴史的景観保全に取り組む都市開発研究財団(UDIF)との交流を開始
- 2004年 タイのチェンマイの歴史的町並みを調査、現地にて町並みの保存再生計画と「チェンマイ型まちづくりセンター」を提案
奈良町での活動25周年記念イベント「賑ならまち・25」にチェンマイのUDIFを招待、国際シンポジウムを開催
- 2005年 インド洋大津波の被災地であるインドネシアのアチェの復興支援のため、奈良にてアチェダンスと写真展の支援イベントを開催、現地の歴史的遺産の復興に取り組むNPOであるアチェ・ヘリテージ・コミュニティの活動支援を開始
PHTのメンバーと協働し、チェンマイ市の都市計画課に対して、ワロロット市場周辺のまちづくり提案プレゼンテーション、チェンマイ旧市街の伝統的木造の分布調査
- 2006年 ペナンにて、ペナン、チェンマイ、奈良によるアジア歴史都市トライアングル交流フォーラム「都市保存における多様性とダイナミズム」を開催、カンボジアとタイのプーケットも参加
インドネシアのアチェを訪問、アチェ・ヘリテージ・コミュニティのメンバーと交流、被災状

況と復興状況を調査

NMC のメンバーを JICA シニア海外ボランティアとして、チェンマイの都市計画支援(景観保存)に 2 年間派遣

アチェ・ヘリティジ・コミュニティのメンバーを奈良に招待し国際フォーラムを開催、阪神淡路大震災被災地も訪問、町並み保存と防災まちづくりのノウハウを伝える

2007 年 インドネシアのアチェを訪問し復興状況を調査、現地でワークショップセミナーを開催
チェンマイにて奈良とチェンマイの地域交流フォーラム「市民主体による景観保全と地域防災の可能性を探る」を開催

2008 年 JICA シニアボランティアとしてチェンマイに赴任していたメンバーが帰国、帰国報告会を開催

2009 年 中国の武漢の漢正街を調査し国際都市シンポジウムに出席
韓国を訪問し、全州とソウルのまちなみ保存の状況を調査、韓国国土研究院と意見交換会を開催

韓国のソウル北村地区の町並み保存に取り組む北村文化フォーラムとの交流を開始

2010 年 韓国ソウルを訪問し、北村地区の町並みを調査
水原市、高陽市、ソウル市江北区など、韓国からの奈良来訪が相次ぐ
平城遷都 1300 年記念事業の一環として、アジア伝統的住まいパネル展「アジアの歴史都市と奈良の住まいと暮らし」、地域間国際交流フォーラム「市民が支えるアジアの多民族共生世界遺産－マレーシア・ペナン」「韓屋地区の町並み・伝統文化の継承を考える－韓国・ソウル・北村」を開催

日中国際都市シンポジウム「非正規都市」を開催

2011 年 中国アモイにて日中国際都市会議を開催

2012 年 韓国ソウル北村地区の町並みを調査、現地にて国際フォーラム「歴史的町並みの持続可能性－保全と開発の間－」を開催

韓国ソウル近郊の南韓山城を調査、南韓山城保存観光財団と交流

3) 経験交流を踏まえた新たなネットワークの構築へ

2012 年 当事業の準備調査として、ミャンマーのヤンゴンを訪ね、現地の歴史的町並みの状況や町並み保存組織であるヤンゴン・ヘリティジ・トラストの活動状況を調査

2013 年 当事業の経験交流プロジェクトとして、マレーシアのペナンにて国際シンポジウム「アジアの町並み保存ネットワークとその未来－歴史遺産、民族アイデンティティの継承、アジアのダイナミズム－」を開催、会議の成果として新たに「アジア・ヘリティジ・ネットワーク」を結成

2-2. ミャンマー・ヤンゴン訪問

マレーシア・ペナンでの国際シンポジウムに先立ち、藤野正文副理事長と長谷川徹理事が、2013年11月22日（木）～25日（日）にミャンマー・ヤンゴンを訪問した。急成長する経済と投資により歴史的建物の破壊が危惧される中、町並みを視察し、新しく結成された町並み保存組織の「ヤンゴン・ヘリテジ・トラスト」との面会を行った。

1) ヤンゴンの町並み

ヤンゴンは、ミャンマーのほぼ中央に位置し、2006年のネピドーへの首都移転まではミャンマーの首都であり、人口約500万人（2011年）で国内で最大の都市である。

また、約2000年の歴史を持つ町であるが、19世紀イギリス植民地時代に現在の町の中心部が形成され、ヤンゴン川に面して港があり、川沿いの道路と駅に向かう道路に沿って税関施設、役所、大手の商社が建設された。また、広大な敷地に多くの行政施設も建設された。その1つが旧最高裁判所でありコロニアル様式の壮麗な建物である。



旧最高裁判所

イギリスの占領時の都市計画により、ヤンゴンの中心部の街区は南北方向に道路が通り、南に面するヤンゴン川からの風が通り抜け、歩行者にとって快適である。左端の1番通りから64番通りまであり、3階建、4階建の建物が多く、ショップハウスが隙間なく建っている。通りにより商売や人種の特徴があり、インド人街や中華人街、貴金属、電気部品、生地、家具、食料品など通りごとに特徴がある。



街中のショップハウス

ショップハウスはコロニアル様式の特徴を残しているものが多く見られる。

2) 都市開発の状況

イギリス植民地時代の中心市街地は、その後1920年から1930年代に多くの建物が建設され、北部への市街地拡大のピークとなった。1960年代には、東西の川を超えて拡大を続けた。

土木建築に関する都市開発を担う行政組織はYCDC（ヤンゴン・シティ・ディベロプメント・コミッティー）であり、20年ほど前からの組織である。まだ都市計画法や建築基準法がうまく機能して

おらず、また公共交通や上下水道が全く不十分である。JICA ミャンマー事務所では都市マスタープランを策定し、今年2月に YCDC に提出したところ。

民間ではプロジェクト重視の開発が進んでおり、パゴダ周辺に12階建てのビル建設や20～30階建てのビ計画もある。「開発業者には資金力や政界との人脈を持つ人など実行力を持った大変な人たちがいる。」との話もあった。

5つの政府所有建造物が保全のための修復工事が行われているとの情報（ミャンマータイムス2011）もあるが、ほとんど修復工事の状況は確認できなかった。

3) ヤンゴン・ヘリテイジ・トラスト (YHT)

YHT の理事である Moe Moe Lwin (モモ) さんと会うことができた。彼女はヤンゴン建築家協会の会長をしており、幅広い活動を行っている。YHT へ、奈良まちづくりセンターの活動紹介とペナン国際シンポジウムへの招待状を渡し出席の約束を行った。(以下は、ヒアリング内容)

YHT は、2012年の初めから設立の動きがあり、同年6月に設立した。代表は、ウ・タント（第3代国連事務総長1961～1971）の孫（歴史家）である。メンバーは、10名が役員で建築家、実業家などからなり、他に助言をもらうメンバーもいる。

YCDC は2001年に重要な歴史的建造物を189件登録したが、内容と件数ともに十分でない。文化財保護法は、パガンで適用されているが、十分でなく効き目がない。またヤンゴンでは適用されていない。



左から NMC 長谷川氏、YHT モモ氏、NMC 藤野氏

YHT は、歴史的建造物を発見・発掘リストを作成する活動をしている。中心部の一部には、更に約150件の重要な建造物がYHTの調査により発見された。歴史的な建物や景観を守るために法律が必要と考えている。

歴史的建造物の多くは植民地時代のものであるが、ミャンマー人の設計で有名なものは、ヤンゴン市庁舎があげられる。また伝統的な建物としては、パゴダの建物があげられる。

YHT は市長とも親しい関係であるので、歴史的建造物を活かしたプロジェクト提案をしたい。納得してもらうためには実例が必要である。

モモさんは、「少し前に旧最高裁判所の開発計画に反対する弁護士らのデモがあった。一部の知識人にせよ、歴史的な価値を認めて行動する市民がいることが我々に対して何よりの応援である。1月のペナン会議にて各国の人々との交流を深め、自国の実りある活動へとつなげていきたい。」とのことであった。

4) 今後の展開

急速な都市開発が進むなかで、ヤンゴンの貴重な歴史的資産が消失する危機が迫っている。

日本側ではミャンマーの代表的文化遺産であるバガン遺跡群などの保護に向けての調査体制が整備されたところであり、ヤンゴンの歴史的景観の保全のための施策は、今後の課題レベルではないかと思われる。

センターとしては、YHT をペナン会議に招待し、アジアの歴史的町並みを保全しようとしている民間組織間での経験交流のきっかけをつくったところである。今後はYHT と調整を図りながらネットワーク間での支援も含め、引き続きヤンゴンの歴史的景観の保全、再生について支援の可能性を探っていきたい。

3. 国際シンポジウム（マレーシア・ペナン）の概要

3-1. プログラム

第1日、2013年1月12日（土）、午前8時から午後5時

場所：ペナン潮州会館ホール

午前8時 ホテル23 ラブレーンに集合

午前8時15分 ジョージタウンの歴史遺産ウォーク

- * 孫文のペナン基地記念館(Sun Yat Sen Museum)を訪問
- * ジョージタウン世界遺産法人の事務所を訪問

午前10時30分 ペナン潮州会館への歓迎／リム・ゲックシャン（ビデオ映像）

午前10時45分 ジョージタウン世界遺産の紹介／リム・チューイピン（ジョージタウン世界遺産法人）

午前11時25分～

- 「ペナン・ストーリー—歴史的な物語の提示による地域の文化多様性の描写」
／クー・サルマ・ナスシオン（ペナン・ヘリティジ・トラスト）
- 「ペナンのヴィジョン—遺産研究のための知識バンクを作る」／グウィン・ジェンキンス博士
- 「ジョージタウンの無形文化遺産目録作り」／リム・ゲックシャン（ペナン・ヘリティジ・トラスト）

昼食

午後2時～

- 「現存する歴史遺産とペナン職人徒弟プログラム」／ホー・ショウフン（ペナン・ヘリティジ・トラスト）
- 「ジョージタウン世界遺産を讃える」／リム・チャンウェイ、ホー・ショウフン
- 「ペナン・ジョージタウンでのショップハウスの保存と活用」／タン・ヨウイ（陳耀威文史建築研究室）
- 「歴史遺産と歴史財産へのユニバーサル・アクセス」
／ナズィアティ・モド・ヤーコブ（マラヤ大学環境建築学部）

第2日、2013年1月13日（日）、午前9時から午後5時

場所：イースタン&オリエンタル ホテル(E&O Hotel)

午前9時 参加者受付

午前9時30分 ペナン・ヘリティジ・トラスト会長クー・サルマ・ナスシオンからの歓迎

午前9時40分

モデレーター：A. ガファー・アーマト教授（マレーシア科学大学）

基調講演「世界文化遺産の保全4分野における新しい潮流—アジアの文化的ダイナミズムを考える」

／宗田好史（京都府立大学環境デザイン学科教授、日本イコモス理事）

午前10時30分～

- 「アジアの町並み保存ネットワークと奈良まちづくりセンター」
／岩井一郎（(社)奈良まちづくりセンター、日本）
- 「より力強い遺産保全運動への20年間」
／カトリニ・プラティハリ・クボントゥブ（インドネシア・ヘリティジ・トラスト、インドネシア ジャカルタ）
- 「タイ・イコモスと保全活動」／ヨングタニット・ピモンサティアン（タイ・イコモス）
- 「中国における地域開発と文化を中心とした都市再生の現状」
／龍元教授（廈門・華僑大学、中華人民共和国）
- 「ヤンゴンの遺産保全：取り組みと課題」
／モウ・モウ・ルウィン、チョウ・カリヤー（ヤンゴン・ヘリティジ・トラスト、ミャンマー）

昼食

午後1時45分～

- 「バンダ・アチェと遺産保全運動—津波から8年が経過して」
／イエニー・ラマヤティ（アチェ・ヘリティジ・コミュニティ基金、インドネシア）
- 「プーケット旧市街に残るショッパハウスの変わりゆく表情」
／プラニー・サクルピパタナ（タイ・プラナカン協会、タイ）
- 「今井町重要伝統的建造物群保存地区の空き家活用に関する事例」
／米村博昭（(社)奈良まちづくりセンター、日本）
- 「プノンペンの開発と遺産保全の課題」
／ヤム・ソクリー（クメール建築ツアーズ、カンボジア プノンペン）
- 「変わりゆく台北の歴史的地区—大稲埕の事例から」／アリス・チウ（台湾歴史資源経理学会、台湾）
- 「クリエイティブ・アーバン・ソリューション・センター：チェンマイ学習センター」
／マニサワード・ジンタピタック、ヌタコルン・ヴィティタノン（UDIF、タイ チェンマイ）
- 「歴史的エリア奈良町—現状とNMCによる最新プロジェクトについて」
／室雅博（(社)奈良まちづくりセンター、日本）
- 「北村の都市開発の歴史と現状」／イ・ジュヨン、イ・キュンタク（北村文化フォーラム、韓国 ソウル）

第3日、2013年1月14日（月）、午前9時から午後5時

場所：ペナン潮州会館ホール

午前9時 受付

午前9時30分 参加団体間のクローズド・ミーティング（参加団体以外の参加者はオブザーバー参加）

遺産保全における課題

奈良まちづくりセンターのペナン宣言案

ネットワークの協力策についてブレインストーミング

昼食

午後1時30分 ネットワークの協力策についてブレインストーミング

3-2. 参加団体

参加団体は、9ヶ国地域から合計20組織である。

Korea	Bookchon Cultural Forum, 北村文化フォーラム
China	Huaqiao University, Xiamen, 華僑大学
Taiwan	Taiwan Institute of Historical Resources Management, 台湾歴史資源経理学会
Cambodia	Khmer Architecture Tours, クメール建築ツアーズ
Myanmar	Yangon Heritage Trust, ヤンゴン・ヘリティジ・トラスト
Thailand	Thai ICOMOS タイ・イコモス Chiang Mai Urban Development Institute Foundation, チェンマイ都市開発研究財団 Creative Urban Solutions Center, クリエイティブ・アーバン・ソリューション・センター Phuket Community Foundation, プーケット・コミュニティ基金
Indonesia	Indonesian National Heritage Trust, インドネシア・ナショナル・ヘリティジ・トラスト Aceh Heritage Community Foundation, アチェ・ヘリティジ・コミュニティ基金 Badan Warisan Sumatra, バダン・ワリサン・スマトラ PAN-Sumatra Network, 汎スマトラ・ネットワーク Jogja Heritage Society, ジョグジャ・ヘリティジ・ソサイエティ Paguyuban Cak & Ning Surabaya, パグユバン・カク&ニング・スラバヤ
Malaysia	Lestari Heritage Network, レスタリ・ヘリティジ・ネットワーク Penang Heritage Trust, ペナン・ヘリティジ・トラスト George Town World Heritage Incorporated, ジョージタウン世界遺産法人 Perak Heritage Society, ペラック・ヘリティジ・ソサイエティ
Japan	Nara Machizukuri Center Inc., (社)奈良まちづくりセンター

3-3. シンポジウム内容

第1日【セッション1】

発表1：「概論ーペナン潮州会館の改修について」

Introduction to the Restoration of the Penang Teochew Association.

リム・ゲックシャン(Ms Lim Gaik Siang)、ペナン潮州会館理事・保全顧問、ペナン・ヘリティジ・トラスト
名誉会計・実行委員

リム・ゲックシャン氏はまずペナン潮州会館の保全プロジェクトを簡単に紹介した後、ビデオを使って潮州文化と韓江家廟(Han Jiang Ancestral Temple)の改修について詳細な説明を行った。

発表2：「概論ージョージタウン世界遺産について」

Introduction to the George Town World Heritage Site

リム・チューイピン(Ms. Lim Chooi Ping)、ジョージタウン世界遺産法人ジェネラル・マネジャー

リム氏はまず、ジョージタウンの世界遺産を参加者に紹介。世界遺産の地理的、地政学的な説明を行い、続いて文化的、建築的側面について語った。彼女によれば、これらすべての特徴がユネスコによる世界遺産認定をもたらした。

また、リム氏はジョージタウン世界遺産の管理者であるジョージタウン世界遺産法人(GTWHI)についても紹介を行った。世界遺産の安全を守る以外に、同法人は世界遺産に関する規制、監視、教育、認知普及、そして振興を国内外で行うセンターとしての機能を持っている。ヘリティジ・クリニック、一般向けのトーク、フォーラム、ワークショップ、ガイド・ツアー、データベース作りなど、数多くのプログラムを行うほか、レスタリ・ヘリティジ・ネットワークやジョージタウン・フェスティバルなどとの連携による特別プロジェクトも実施している。

質疑応答：

発表の後には質疑応答があり、短い時間の間にいくつかのトピックが取り上げられた。最も多かったのは、ジョージタウンのコアゾーン（資産）とバッファーゾーン（緩衝地帯）に関するもので、どのように二つのゾーンが分けられているのか、という問いが寄せられた。リム氏によれば、境界画定はユネスコへのリスト提出の際に行われ、古い市街区分に基づいていたという。彼女はまた、二つのゾーンはほぼ同じ内容のガイドラインによってそれぞれ規制・管理されていることを明らかにした。

その他には、世界遺産区域内の不動産規制とジェントリフィケーションに対応できる既存のガイドラインについて議論が交わされた。リム氏によれば、不動産の売買・賃貸に関する規則や価格をコントロールする規制はないという。

一方、GTWHIはこの問題について積極的な役割を果たしており、資産所有者、開発業者、テナントに対して、地域の生活文化を維持させるために価格を抑えることの重要性を説いている。

最後に、リム氏はジョージタウンの遺産管理計画策定におけるステークホルダー（利害関係者）の関わり

方について、現在行っている取り組みを紹介した。彼女によれば、計画策定のすべての段階において、ステークホルダーが関わっているという。現在、計画は最終段階に来ており、準備ができ次第、パブリック・コメントを募集し、その後ユネスコに提出される。

発表3：「ペナン・ストーリー—歴史的な物語の提示による地域の文化多様性の描写」

Penang Story: Community mapping of cultural diversity through historical narratives.

クー・サルマ・ナスシオン(Ms Khoo Salma)、ペナン・ヘリテージ・トラスト会長

クー氏は、「ペナン・ストーリー」について発表を行った。このプロジェクトは、ペナンの歴史をめぐる様々なステークホルダーやコミュニティ間のネットワークを築くことを目的に、2001年から始まった。ユネスコへの登録前ではあったが、ユネスコが掲げる「顕著な普遍的価値」(OUV)と同様の価値を取り上げている。この価値観は、「～多様性は人類を構成している集団や社会のそれぞれの特性が、多様な独特の形をとっていることに表れている」とうたう「文化の多様性に関するユネスコ世界宣言」の精神とも相通じている。ペナン・ストーリーでは、コミュニティがそれぞれのストーリーを語り、口伝によるペナンの歴史に関わっていく。これらのストーリーとともに、ペナン・ストーリーでは四つの言語による四つの口語表現をまとめ、ペナンの歴史を記録した論文集として「ペナン・ストーリー・カンファレンス」で発表を行った。

ペナン・ストーリーは、シンク・シティー株式会社の支援を得て、2010年にも引き続き実施された。今回は、ペナンの歴史をたどるだけでなく、様々な才能を持った人たちにペナンに戻ってきてもらい、彼らの研究成果や発見について語ってもらうことを目指した。

発表4：「ペナンのヴィジョン」

Visions of Penang

グウィン・ジェンキンス博士(Dr Gwynn Jenkins)、保全コンサルタント・修復士

ジェンキンス博士の発表は、ペナンに関連した重要な視覚的資料や資源のアーカイヴについて行われた。「ペナンのヴィジョン」プロジェクトは、収集可能なペナンの写真、図面、地図を整理・収集するためのプラットフォームとして始まった。彼女は、提供された情報がいずれ言語などの障壁を超えて、公共的な目的で活用され人々の理解を深めていくことを指摘した。アーカイヴされた素材は、保全に関わる建築家を助け、保全の対象となっている建物の種類や構造を知る手掛かりになる。

ペナン・ヴィジョンは、ジョージタウンの様々な場所の19の地図をスキャンし、構成されている。他の多様な素材やペナンに関する地図を集めて電子化する努力は続いており、アーカイヴはウェイド葉書コレクション(Wade Postcard Collections)やペナン州立図書館の写真を取めるまでに拡張した。

発表5：「ジョージタウン世界遺産における無形文化遺産活性化プロジェクトについて」

Revitalizing Intangible Cultural Heritage in George Town World Heritage Site (RICH) project.

リム・ゲックシヤン(Ms Lim Gaik Siang)、ジョージタウン世界遺産における無形文化遺産活性化プロジェクト(Revitalizing Intangible Cultural Heritage in George Town World Heritage Site project - RICH)プロジェクト・コンサルタント

リム氏は、RICH プロジェクトについて発表を行い、ペナンの無形遺産に関する記録の方法とプロセスに焦点を当てた。このプロジェクトは、有形・無形の遺産が世界遺産のアイデンティティを形成すると謳う「顕著な普遍的価値」(OUV)の三番目の登録基準にあてはまる。無形遺産には、習慣、描写、表現、知識、技術などとともに、関連して使われた器具、モノ、道具も含まれる。バンコク協定(Bangkok Convention)では、無形文化遺産と地域の文化アイデンティティ形成におけるその重要性をさらに強調している。RICH プロジェクトは、地域コミュニティレベルの無形文化遺産に焦点を当て、商取引、職業、職人の技術、手工業、芸術や文化を取り上げている。

続いてリム氏はプロジェクトの成果を紹介し、公共消費や研究のためのツールとして活用される可能性を説明した。

ディスカッション：

リム氏による発表の後、短いディスカッションの時間が設けられた。前の質疑応答と同様、発表で取り上げられたテーマについて、ディスカッションを通していくつかのトピックが出された。まず、ペナン・ストーリーと、ヨーロッパとの歴史をどのようにとらえるかに関して議論が交わされた。クー氏によれば、ペナンにおけるヨーロッパの歴史を記録する積極的な活動はそれまでなかったが、ヨーロッパ人のコミュニティはプロジェクトに積極的に参加してきたという。ペナン・ストーリーがペナンの物語に関するものと認識されたため、多くのコミュニティが口伝によるペナンの歴史に参加、貢献した。

続いて、ペナンの遺産と文化を守るための活動に対して、感嘆と感謝の声が寄せられた。マラヤ大学のフィオナ氏(Ms Fiona)は、様々な努力やプロジェクトが行われていることに驚きを表し、これらのプロジェクトがペナン以外の場所でも行われるべきだと語った。リム・ゲックシャン氏は、RICH プロジェクトがその種類のプロジェクトとしてはマレーシアで初めて行われたこと、またいろいろな面からみて成功だったと言えることを説明した。プロジェクトでは、ジョージタウンの無形文化遺産をステークホルダー同士が共同所有することを促し、ジョージタウンの保存活動に若者が参加するためのプラットフォームとしての機能も果たした。彼女はまた、このプロジェクトが他の州でも行われることを期待したい、と述べた。

最後に、ジョージタウンの建造景観に関する議論があった。上海大学の張氏(Ms Teoh)は、特別区域計画の中に様々な新しい開発計画があることを指摘し、新しい建築を管理するガイドラインがあるかを尋ねた。リム氏は、ジョージタウンにおける新しい開発や建築を管理・規制するメカニズムがすでにあること、ジョージタウン世界遺産法人やペナン・ヘリティジ・トラストをはじめとする多様なステークホルダーがそれに関わっていることを説明した。

第1日【セッション2】

発表6：「現存する歴史遺産とペナン職人徒弟プログラム」

Penang Living Heritage Treasures and Penang Artisans Apprenticeship Programme (PAPA)

ホー・ショウフン(Ms Ho Sheau Fung)、ペナン・ヘリティジ・トラスト(PHT)ジェネラル・マネジャー

ホー氏は、ジョージタウンの無形文化遺産について発表を行い、それに関連して PHT が行っている 2 つの

プロジェクトを紹介した。まず、彼女はこれらのプロジェクトに至った背景と要因を説明した。1999年の賃貸管理法(Rent Control Act)廃止によって、ジョージタウンの多くの家族が町を離れて郊外へ移ることを余儀なくされた。この結果、伝統的な商売、工芸、そして町の中で成立していた需給関係が大きな影響を受けた。法律の廃止に伴う問題を認識したPHTは、Arts-Edと連携してこのような伝統的な商売の目録を作成し、子どもたちを始め多くの人々の関心を集めようとした。その後、いくつもの活動が続いて行われ、徐々にではあるが、職人や商人の存在が社会全体、そして町を訪れる人たちに再び知られるようになった。

2005年には、商人や職人、手工業者の認知度向上を目指して、PHT主導による生活遺産財産賞(Living Heritage Treasures Award)が設立された。このプログラムでは、職人や手工業者が町を訪れる人や観光客と交流するための後押しも行った。受賞候補者は一般から公募し、受賞者の名前は一生残ることになる。

さらに、PHTは2009年にペナン職人徒弟プログラム(Penang Apprenticeship Artisan Programme - PAPA)を開始し、職人とその技術を学ぼうとする人をむすぶ試みを行った。職人の持つ知識や技術を次世代に伝え、伝統的な産業や手仕事の継続と発展を目指している。

発表7:「ジョージタウン世界遺産を讃える」

George Town World Heritage Site Celebrations

ホー・ショウフン(Ms Ho Sheau Fung)、リム・チャンウェイ(Mr Lim Chung Wei)、リム・チャンウェイ氏は、ジョージタウン世界遺産法人(GTWHI)所属

リム氏は、ジョージタウンの世界遺産登録を祝う小さなお祭り、ジョージタウン世界遺産記念祭について、その誕生から発展、そしてジョージタウン・フェスティバルへと変わっていった過程を紹介した。ジョージタウン・フェスティバルは大きなイベントとなったが、その中心がジョージタウン世界遺産記念祭であることは変わらない。

続いて、ホー氏からは、フェスティバルのプログラム選定のためのテーマやコンセプトが紹介された。また、フェスティバルとコミュニティの多様な関わり合いについても説明し、フェスティバルがコミュニティについての認識を高め、学ぶ機会を提供していると話した。

発表8:「ペナン・ジョージタウンでのショップハウスの保存と活用」

Shophouse conservation and Adaptive use in George Town

タン・ヨウイ(Mr Tan Yeow Woi)、遺産コンサルタント、保全建築家

ショップハウスの存在は、ジョージタウン世界遺産登録の際、「顕著な普遍的価値」(OUV)の基準(3)を満たすうえで重要な要素となった。タン氏は、ジョージタウンに残るショップハウスの歴史と、その発展と衰退を導いたいくつかの要因を紹介した。ショップハウスの衰退は、いくつかの取り壊しも含め、1970年代に始まったという。

2008年以降にショップハウスの再活用が増えたが、取り壊しや放棄される速度には追い付いていない。他にも、熟練技術者や材料、資金の不足など、ショップハウスの保全、改修を妨げる要因が存在する。タン氏は、発表の終わりに、十全な改修・保存へと至った3つの成功事例を紹介した。

発表9：「歴史遺産と歴史財産へのユニバーサル・アクセス」

Universal Access to Heritage Sites and Properties

ナズィアティ・モド・ヤーコブ博士(Dr Naziaty Mohd Yaacob)、マラヤ大学環境建築学部(Department of Built Architecture, Universiti Malaya)

ナズィアティ博士の発表は、世界遺産への障がい者や高齢者のアクセスを高める考え方を説明し、遺産地のバリアフリー度を検証した。アクセスを保証する三原則は、使いやすさ、安全性、機能性である。バリアフリーを謳っているにもかかわらず、遺産地内でこれらの原則に準じていない事例が示された。そして、シンク・シティー株式会社の支援を受けて行われたe アクセス・ガイド・プログラムと、その中で作られたアクセス性の高い12の遺産地のチェックリストが紹介された。

ディスカッション：

発表を受けて、参加者・発表者相互の理解を深めるべく、ジョージタウンに関するいくつかのトピックが議論された。最初の話題は、失われつつあるペナンの産業と技術についてであった。ホー氏は、ペナン・ヘリテージ・トラストのプログラムがいくつかの産業や技術に光を当てたとする一方で、現在の活動は十分でないとの認識を示した。さらに、ジョージタウンの文化遺産を守るためにより多くの努力とサポート、特に政府の支援が必要だと訴えた。ペナン舞台芸術センター(Penang Performing Arts Centre - PenangPAC)のオオイ・キー・ハウ氏(Mr Ooi Kee How)は、ジョージタウンの伝統芸能のショーケースと支援獲得のためにPenangPACを活用することを提案した。

続いての議論では、ジョージタウン・フェスティバルと記念祭が取り上げられた。ホー氏が、記念祭がどのようにして拡大してきたかを説明し、それとともに地元コミュニティの理解や認識が高まっていることを紹介した。クー・サルマ氏はさらに、フェスティバルのプログラムの中での有料公演と無料公演での観客の反応の違いに言及した。

建築の保全・保存運動に関しては、特に歴史的建造物やジョージタウンのショップハウスを残していくための方法やガイドラインに議論が集中した。タン氏は、規制が存在する一方で、多くの所有者がそのことを認識しておらず、規制の不徹底が取り壊しやショップハウスの変化につながっていると指摘した。

建物へのアクセス向上とバリアフリー化についての議論では、ナズィアティ博士がガイドラインを順守したホテルや遺産地の例を紹介し、その一方で、多くの建物がガイドラインに従っていないことを指摘した。

第2日【セッション1】

基調講演

「世界文化遺産の保全4分野における新しい潮流」

New trends in 4 fields of Heritage Conservation

宗田好史教授

宗田教授はまず、2012年に京都で行われた世界遺産と持続可能な開発に関する会議を振り返ることから議論を始めた。この会議では、遺産保全の持続可能性や様々な活動領域を超えた国際ネットワークを担保する

うえで地域コミュニティが重要な役割を果たすことが確認された。コミュニティの役割が十分に認識され、遺産保全の様々な側面において最良の方法は地元コミュニティに相談することだ、とされた。

続いて宗田教授は、観光産業のマーケットがタイ、シンガポール、マレーシアで拡大していることを指摘し、ASEAN 内における観光の変化を示した。この結果は、各国の GDP に反映されているという。一方で、GDP の伸びは、コミュニティの発展を必ずしも保証するものではない。GDP からの富の配分方法の変化に影響を与える要素は、他にも存在する。遺産保全に関していえば、それらの要素には、市民運動、参加、分権、議会や憲法といったことが含まれる。

現在、遺産保全における変化は、遺産保全を目的に沿って管理できる知識や技術を身に付けたファシリテーターや専門家によって導かれている。また、我々の関心が「古い建物」を残すことからより幅広い遺産や価値に移っていることを受けて、遺産の持つ価値もまた変化を見せている。そして、遺産に対して責任を持つ主体も、中央政府や国家から地域コミュニティ、市場に参入している企業や民間セクターへと移っている。一方で、コミュニティにおいては伝統が大きな足かせになっていると考えられており、変化のダイナミズムも各コミュニティで異なる多様な貧困のあり方によって制約を受けている。

遺産保全の価値を維持していくためには、その価値を、役割や影響力の違いなど、様々なレベルの参加や保護への関わりを通して見るべきかもしれない。最初の管理者となるのは、住民や所有者など、直接的な関わりを持つ人々である。続いて、保全活動が持続可能であるかを担保する地域コミュニティの存在がある。三番目に、市民がいる。彼らは、保全活動を持続させるための取り組みに参加する役割を担う。最後に、四番目の「保護者」は観光客で、地域経済に貢献することで、遺産保全のための市場を生み出す。

遺産保全には制約ばかりがあるのではない、と宗田教授は言う。彼は、呉服屋や陶工など日本の伝統産業の会社が、自分たちの町並みや遺産を保存しようと活動する事例とともに、それらの会社が現代の需要にこたえるために新しい商品開発やイノベーションを行っていることを紹介した。それによって、会社自身がビジネスを多様化、刷新させるだけでなく、かつての伝統文化や町並みへの関心呼び起こすことができる。

発表の最後に、彼は現在最も関心を寄せているという京都の町家について語った。町家は京都の伝統的遺産であるとともに、住居や商店として使われている。遺産としての町家を残していくためには、これまでとは違う活用方法やデザインを模索し、地域コミュニティの新たなニーズに沿った変化を施していく必要があるという。

質疑応答：

基調講演に続く質疑応答では、インターネットやソーシャルネットワークを活用して保全活動を進める可能性について議論が交わされた。他には、ペナンの多様性や多文化性が遺産保全におよぼす影響について質問が出されたが、時間が足りなかったため、宗田教授が個別に答えることとなった。

発表1：「アジアの町並み保存ネットワークと奈良まちづくりセンター」

Asian Network for Urban Conservation and Nara Machizukuri Centre

岩井一郎、(社)奈良まちづくりセンター(NMC)

岩井氏はまず、アジアの町並み保存ネットワークの歴史に言及し、これまでに行われた多様な活動や会議

を紹介した。チェンマイなど各地で遺産保全への認識を高める活動に関わり、2004年のスマトラ沖地震など災害からの復興支援にも携わってきた。

彼はまた、アジア各地でワークショップやトークを行い、歴史的建造物や無形文化遺産の保存に取り組んできた NMC の活動についても紹介した。歴史的な町並みや建築は、取り壊しや間違った保全活動によって少しずつ失われているという。地元住民やコミュニティが保全活動や観光振興のために排除されるといった、ユネスコ世界遺産地における誤った遺産保全の事例も紹介された。

最後に、彼は保全活動の改善への期待を述べ、遺産の保全と文化の多様性を確保していくために活用できる戦略と考え方を提示した。

発表2：「より力強い遺産保全運動への20年間」

Two Decades toward a Stronger Heritage Movement,

カトリニ・プラティハリ・クボントゥブ(Ms Cartini Pratihari)、インドネシア・ヘリティジ・トラスト (Indonesia Heritage Trust)

カトリニ氏は、過去20年間にわたって展開されてきたインドネシアの遺産保全運動を紹介した。1994年に人々の遺産保全への関心を高めようと始まった運動から、大きな進歩が成し遂げられてきた。現在では、遺産保全の価値と重要性が理解され、インドネシア・ヘリティジ・トラスト(BPPI)や遺産のための自然災害時緊急対応組織など、いくつもの重要な組織が立ち上がっているという。

彼女は続いて、インドネシアで行われた遺産保全のための活動のいくつかを紹介した。有形遺産だけでなく、無形のものやインドネシア国内の自然遺産も対象に行われている。

発表3：「タイ・イコモスと保全活動」

ICOMOS Thailand and Conservation Activities

ヨングタニット・ピモンサティアン(Mr Yongtanit Pimonsanthean)、タイ・イコモス(ICOMOS Thailand)

ピモンサティアン氏は、現在タイの保全活動で見られる次の3つの課題を紹介し、発表を始めた。活動や団体ごとに保全の方法・アプローチに大きな違いがあること、遺産の価値と認定、そして保全対象となるエリアについて。そして、タイで行われている保全活動の取り組みをいくつか説明した。また、バンコクの中街内に建設予定のモノレールなど、歴史的建造物や周辺コミュニティが脅かされている事例、そしてイコモスの政府との協働の状況も示された。

続いてイコモスとその活動の紹介が行われた。ヴェネツィア憲章が1964年に採択・批准され、1965年パリでイコモスが設立されたが、その組織がタイ国内で立ち上がるまでにはさらに20年がかかった。2009年、タイ・イコモスは非政府組織になり、現在では国内メンバーが約300人/団体、海外メンバーが20人/団体参加している。タイ・イコモスでは、ワークショップ、ミーティング、会議、保全活動、専門家による遺産ガイド・ツアーなどの活動を行っている。

発表4：「中国における地域開発と文化を中心とした都市再生の現状」

The Current Status of Community Development and Culturally - led Urban Regeneration in China

龍元教授(Prof Long Yuan)、廈門・華僑大学／中華人民共和国(Huaqiao University, Xiamen, P.R.China)

龍教授は、遺産保全に関わる様々なレベルのステークホルダーについて語ったが、いずれのレベルでも中国共産党の管理と影響下にあるという。続いて中国における遺産保全の先駆的な取り組み、徐々に実り始めている取り組みについても紹介した。

発表5：「ヤンゴンの遺産保全：取り組みと課題」

Yangon Urban Heritage Conservation, Efforts and Challenges

モウ・モウ・ルウィン(Moe Moe Lwim)、ヤンゴン・ヘリティジ・トラスト(YHT)

ルウィン氏は、ヤンゴンの遺産保全活動の現況を紹介し、活動が注目を集めるようになってからの発展についても語った。活動の進行は決して速くなく、多くの課題に直面しているが、それでも動き続けており、2012年にYHTが設立されたことで勢いが与えられた。

第2日【セッション2】

発表6：「バンダ・アチェと遺産保全運動—津波から8年が経過して」

Banda Aceh and Heritage Movements: 8 years after the Tsunami

イエニー・ラマヤティ(Ms Yenny Rahmayati)、アチェ・ヘリティジ・コミュニティ基金

イエニー氏は、バンダ・アチェの歴史、地理構造、そして2004年の津波以前に起こった土地使用に関する変化について説明した。アチェの建築遺産は、大きく以下の3つのグループに分類される。古代または考古学的建築、オランダ植民時代の様式または中国式建築、そして最後が2004年の津波以降に建てられたものである。2004年の津波は、多くの記念碑的建築を破壊し、建物や場所の機能を変え、アチェの建築遺産に大きな影響を与えた。

続いてアチェ・ヘリティジ・コミュニティ基金について、設立の経緯、役割、機能などについて説明があった。アチェの遺産保全に関するネットワーク構築、能力育成、認知普及、教育活動などを行っている。

津波から8年が経過し、遺産の状況は大きく、取り壊し、改修、現状維持、放置の四つに分けられるといい、彼女はそれぞれの例となる建物を紹介した。資金不足、専門家や知識の欠如、社会的認知度の低さ、パートナーの不在や法的保護措置の未整備など、いくつかの課題や問題が残っている。

発表7：「プーケット旧市街に残るショップハウスの変わりゆく表情」

The Changing Faces of the Shophouses in Phuket Old Town

プラニー・サクルピパタナ(Ms Pranee Sakulpipatana)、プーケット・コミュニティ基金(Phuket Community Foundation, Phuket)

プラニー氏の発表は、プーケットの「百万長者通り」呼ばれるディブック・ロードを中心に行われた。通りの名前は錫鉱山に由来し、かつては鉱山所有者の豪邸が軒を連ねていた。彼女は、プーケットで見られる遺産的な要素を示し、プーケットが近い将来ベナンと同様に世界遺産に登録されることへの期待を示した。

発表 8 : 「今井町重要伝統的建造物群保存地区の空き家活用に関する事例」

Cases of Practical Use for Vacant Houses at the Imai Important Preservation District for Groups of Historic Buildings

米村博昭、(社) 奈良まちづくりセンター

米村氏は、自身の出身地今井町について、門跡、濠や土塁、寺院、伝統的な民家など、現存する重要な要素を紹介しながら短い発表を行った。伝統的な外観を維持しながらも、これらの古民家は商店、公共機関、宿泊施設やオフィスなど、新しい用途や機能を備えるようになっている。

発表 9 : 「プノンペンの開発と遺産保全の課題」

Development and Urban Heritage Conservation Challenges

ヤム・ソクリー(Yam Sokly)、建築家、研究者、クメール建築ツアーズ カンボジア (Architect and Researcher, Khmer Architecture Tours, Cambodia)

ソクリー氏の発表は、1965年に設立されたカンボジア王立芸術大学(Royal University of Fine Arts)の紹介から始まった。同大学は、舞踊芸術、音楽、考古学、美術、建築の五つの学部から成り立っている。続いて、2003年にカンボジアの近代建築への理解を深めることを目的に設立されたクメール建築ツアーズが、実際のツアーの様子とともに紹介された。

さらに、プノンペンの歴史的建造物や町並みについて、それぞれが受けた影響や今後の活用の可能性について語り、最後に保全活動において直面する課題に触れた。

発表 10 : 「変わりゆく台北の歴史的地区—大稻埕の事例から」

Transforming Heritage District in Taipei - The Case Study of Dadaocheng

アリス・チウ(Alice Chiu)、台湾歴史資源経理学会 台湾(Institute of Historical Resources Management, Taiwan)

チウ氏は、台湾・台北の最も古い商業地区である大稻埕で行われている保全活動について発表を行った。大稻埕の歴史は、17、18世紀の清の時代に始まった。最初の移住者が大稻埕に移り住んだのは1851年で、台北はその後1980年代までには台湾で2番目に大きい都市に成長した。港も開かれ、貿易港として茶や絹が取引された。

日本統治時代(1895年~1945年)には、日本が大稻埕の都市構造や地理的な景観に手を加えたことで、新たな発展の時期を迎えた。多くの建物や地区が再開発の対象となり、碁盤状に区画整備が行われた。

1987年、国民党(KMT)による戒厳令の解除、迪化街の拡張に反対する初めての市民デモ行進が行われた後に、まちづくりへのNGOの参加が始まった。迪化街は多くの大ビジネスの中心であり、歴史的遺産や町並みと地区の開発のバランスを考慮する必要性が急速に増していた。

2000年、大稻埕は都市開発条例に基づき歴史風貌特定専用区に指定され、保護と改修、そして区内での開発を制限する根拠が定められた。同時に、公共建築、私的建築いずれにおいても、建物の維持・保全に関する取り組みが多く行われるようになった。

最後に、彼女は大稻埕での改修や保全活動の様子を示して発表を終えた。

発表 11 : 「クリエイティブ・アーバン・ソリューション・センター : チェンマイ学習センター」

Creative Urban Solutions Centre: Chiang Mai Learning Centre

マニサワード・ジンタピタック (Mrs Manissaward Jintapitak)、ヌタコルン・ヴィティタノン (Mr Nuttakorn Vititanon)

ヴィティタノン氏は、タイ第2の都市であり、2016年には760周年を祝うチェンマイの歴史をまず紹介した。チェンマイは、都市であると同時に、日本人や中国人をはじめとする外国人にも人気の高い観光地でもある。一方で、町が大きくなるにつれて、大気汚染や人口過密、都市空間の周辺地域への拡張といった問題を引き起こしている。また、古い考え方にもとづく都市計画規則も問題となっており、チェンマイの旧市街周辺でも無秩序な開発が行われている。

続いて、クリエイティブ・アーバン・ソリューション・センターについての説明があった。同センターは、開発に関する問題に取り組み、改善策の提案を目指している。さらに、都市開発に関連したワークショップ、フォーラム、トレーニング、教育プログラムを様々な層の人々に向けて実施している。

そしてマニサワード氏が、ラーナー王朝時代から残るチェンマイの寺院の保全について、詳細な報告を行った。その中では、技術や知識を持たない職人による改修作業が、結果的に元の構造や素材を壊しているという事例も紹介された。

発表 12 : 「歴史的エリア奈良町ー現状と NMC による最新プロジェクトについて」

The Historical City: Nara Machizukuri - its current situation and NMC in Nara

室雅博、(社) 奈良まちづくりセンター(NMC)

室氏は、NMCの歩みを簡単に紹介した。1979年に発足し、1984年に社団法人奈良まちづくりセンターが設立された。団体の目的は、奈良に数多く集まる、日本の「精神的」「宗教的」遺産を守っていくことである。奈良は、日本で最も古い歴史都市で、710年に町が形作られた。日本の仏教誕生の地であり、今日まで伝統文化が息づいている。奈良のユニークな特徴の一つは、家々が基盤の目のように並んでいることである。1989年には、空き家をミュージアム、ギャラリーといった他の用途、あるいは公共的な目的に使うことを奈良市役所に提案した。

多くの古民家や建物が、市民の熱意と協力によって生まれ変わり、新しい用途のために使われている。その後も取り組みを続け、2004年には地域コミュニティに権限を委譲し、地域のために町並み保存を行う内容を盛り込んだ政策提案書をまとめた。

しかし、このような古民家を再生させようとする努力にも関わらず、改修や改築によって建物の伝統的な特徴や構造が失われるケースも多い。NMCでは、コミュニティでの教育プログラムを充実させるとともに、町家の伝統を維持しながら再生を図っていくシステム作りを目指している。

発表 13 : 「北村の都市開発の歴史と現状」

The Urban Development History of Bukchon Culture Forum and its Current Situation

イ・ジュヨン (Mr Lee Joo - Yeon)、イ・キュンタク (Mr Lee Kyung - Taek)、北村文化フォーラム 韓国 ソウ

ル(Bukchon Culture Forum , Seoul, Korea)

韓国の首都ソウルの歴史地区である北村（ブッチョン）について、まずイ・キュンタク氏が発表を行った。現在、ソウル市は北村地区の住宅区域を歴史文化区域に転換しようとしている。しかし、専門家や市民団体、その他のステークホルダーとの意見交換を経て、この計画は凍結となった。これにより、北村は、社会的な持続可能性を核とした歴史的区域になった。利活用は持続可能な生活を後押しするために行われ、開発のプレッシャーとの調和を図ろうとしている。

第3日【セッション 1】

「アジアの町並み保存ネットワークとその未来」3日目は、関係者のみのクローズド・ミーティングが行われ、堅苦しくない雰囲気の中、様々な参加者が集まって文化遺産をめぐる問題について話し合い、保全ネットワークの目標を深めようとした。ペナン・ヘリテージ・トラスト会長のクー・サルマ・ナスシオン氏がディスカッションのファシリテーターを務め、アジア諸国の遺産保全における課題、NGOと地域コミュニティの協働、保全の課題を明らかにするためにネットワークが取り組むべきことなど、議論される可能性の高いトピックを整理することからスタートした。

ジョージタウンの地図作成について（ファイズ・アクバー）

ジョージタウンの特別区域計画チームに個人で関わっているファイズ・アクバー氏(Faiz Akhbar)が短い発表を行った。彼の発表は、ユネスコによって評価されたジョージタウンの「顕著な普遍的価値」(Outstanding Universal Value - OUV)と、その価値をもたらした様々な要素を紹介し、町の保全のために地図作成と記録が重要であることを強調して終わった。

昨日からの発表に対する質疑応答

ディスカッションと情報共有のためのセッションが行われた。最初に出された質問は、韓国・ソウルの北村地区で実施されている「静かな観光」(silent sight-seeing)キャンペーンについてであった。このキャンペーンについて、イ・ジュヨン氏がより詳しい情報を提供し、特に地元コミュニティの関わりについて語った。彼は、静寂を保つことの重要性、それによって場所の本当の良さと歴史的価値が保たれることを、地元住民が直接観光客に対して説明するという事例を紹介した。

次の質問はヤンゴンに関するもので、政府の民主化に伴って進む新しい開発のことを尋ねた。ヤンゴン・ヘリテージ・トラストを代表してモウ・モウ・ルウィン氏が、主要都市の「中枢機関」を他の都市に移転させる新しい政策を紹介し、それによって遺産保全に対する開発の危険性が減少することを説明した。一方で、彼女は、政策の変化がこれからのヤンゴンの状況を変えると結論付けるのは時期尚早だとコメントした。

奈良まちづくりセンターのペナン宣言案について

奈良まちづくりセンターから提案のペナン宣言（案）についての議論を行った。参加者間でNGOに対する考え方が異なり、合意には至らなかったが、宣言案の趣旨と精神については賛同を得た。

—アジアの都市保存 NGO ネットワークのために—

アジアの町並み保存ネットワークとその未来

—歴史遺産、民族アイデンティティの継承、アジアのダイナミズム—

アジアの大部分の都市は、経済グローバル化のもとで急速な変化を遂げています。最近、アジアでは、歴史的町並みと歴史的コミュニティが危機に瀕しています。歴史的に築かれてきた生活空間や建築遺産は容易に破壊され、現代的な建築物や超高層建築物に建て変えられています。

今こそ、アジアの歴史的町並みと伝統的な人間生活を保存するために、効果的な行動を起こすときです。地域コミュニティを活動基盤とし地域の問題に精通した NGO が、町並み保存において重要な役割を果たさねばなりません。私たちは、アジア中に強いネットワークをつくる必要があります。それは、町並み保存に対する世論を盛り上げ、各国政府に効果的な規制を訴えるとともに、町並み保存に向けての新たな運動を創出する必要があるためです。

ブータン(最終的には未参加)、カンボジア、中国、インドネシア、日本、マレーシア、ミャンマー、韓国、台湾、タイからの代表は、町並み保存のためのアジア NGO ネットワークについて、以下の通り基本的な合意に達しました。

1. 私たちは、アジアの都市とりわけ新興国において、これ以上の歴史的町並みの破壊を食い止めるために、必要な行動を取らなければなりません。そして、全ての歴史的環境を保存するために、最善を尽くさなければなりません。
2. 私たちは、歴史的町並みを、そこで営まれる伝統的な家族生活、コミュニティ、生活無形文化遺産を含む多様な人間活動とともに、保存しなければなりません。
3. 私たちは、歴史的町並みを、全ての民族グループの共存の場として、保存しなければなりません。また、文化的アイデンティティと民族多様性を、尊重しなければなりません。
4. 私たちは、それぞれの地域において、住民参加のプロセスを通して地域住民の多様な考え方を調整し、柔軟でダイナミックな保存計画を立案しなければなりません。
5. ツーリズムは文化間コミュニケーションの重要な要素ですが、私たちは、歴史的町並みにおいて、地域住民の人間生活との調和に配慮しつつ、その振興に努めねばなりません。
6. 私たちは、全ての自然災害から、私たちの遺産を守らねばなりません。また、災害が発生した際には、文化遺産の復興のためにお互い助け合わねばなりません。
7. 私たちは、これらの目的のために、アジア中の歴史的町並みを対象に、強力なアジア都市保存 NGO ネットワークを構築しなければなりません。

ネットワークの協力策についてブレインストーミング

その後は、「ラウンドテーブル」のディスカッションへと移り、遺産保全とその課題、特にアジアの状況について参加者全員が意見や考えを述べた。このディスカッションでは、以下のトピックが繰り返し取り上げられた。

- a. 保全活動のために、新しい、これまでなかったメディアやプラットフォームを活用すること。認知普及、知識や経験の交換に便利。
- b. 保全活動において若者の参加が増えていること。
- c. 強固なネットワークと協働の重要性。新たに保全活動を始める個人や団体を支援する上で、資源や知識の共有は不可欠。
- d. 保全活動のための資金とその限界。
- e. より良い知識共有のための出版物と電子書籍について。
- f. 都市における遺産保全と保護のために、NGO と地域コミュニティを媒介ツールとして活用すること。

第3日【セッション 2】

ネットワークの協力策についてブレインストーミング

2 番目のセッションは昼食後に始まり、参加者はグループに分かれて、都市における遺産保全と保護を進めるためのカギとなる戦略について話し合った。各グループで 3 つの戦略を考え、その中から今すぐに採用できる、カギとなる戦略を 1 つ選んだ。

<Group 1>

3 つの戦略：

- a. ネットワークが行う仕事の全体的な影響力を強める。動機づけのため、地域の保全活動に対して表彰を行う。
- b. ニュースレターや電子ニュースレターを利用してコミュニケーションを強化する。コーディネーターとライターが必要。Mailchimp というアプリケーションが解決策になるかもしれない。
- c. ソーシャルメディアの利用、ASANA のようなコミュニケーション・ツールの活用。ASANA は、使うグループのニーズに合わせて仕様をかえることができる。(カギとなる戦略)

<Group 2>

3 つの戦略：

- a. プログラムの交換、共有。いくつかのプログラムはすでに使えるようになっており、ネットワークの強化に役立つ。
- b. 日本にはいくつもの財団があり、交流プログラムのための資金を獲得できるのではないか。
- c. 若者の関心を高めるために、実地調査や実践的なトレーニングを行う若者向け共同プログラムをネットワークで作る。まずはホスト国やネットワークの核になる国で実施し、ネットワーク

内で共有する。(カギとなる戦略)

<Group 3>

3つの戦略:

- a. 組織のディレクトリについて、更新の必要性、専門家の意見、教育、知識など新しい情報による補完の必要性がある。
- b. フェイスブックなどのソーシャルメディアを通じたコミュニケーションを充実させ、より多くの人、特に若者に呼びかける。また、ネットワークに参加する国同士が、より手軽につながれるよう手助けをする。(カギとなる戦略)
- c. 情報、知識、資源を集約させたデータベース・センターを作る。
- d. 各都市や国々、団体で行われるイベントのカレンダーを作る。

結論として、最も可能性の高いソリューションは、より多くの人に働きかけるためにソーシャルメディア、特にフェイスブックを活用することであった。もう一つの選択肢として、ネットワークに参加する団体同士をつなぐためのツイッター・アカウントを作ることもあげられる。一方で、知識共有のプロセスを維持させ、ネットワークの運営も行うコーディネーターが必要とされる。

セッションはさらに、新しいネットワークの名称についても議論した。新しい名称合意を受けて、参加者たちはこのネットワークのメンバーとなり、その活動において責任を持つと同時に、各国の間でより良い知識と資源の共有が行われるよう努力しなければならない。この議論を経て、アジア・ヘリテージ・ネットワーク (Asia Heritage Network - AHN) という名称が採用されることになった。

新しいネットワーク結成とともにセッションは終了となり、PHT とインドネシア・ヘリテージ・トラストの間で、了解覚書 (MoU) の簡単な調印式が行われた。この調印式により、双方の遺産保全と保護を進めるために、インドネシアとペナンが新たに提携して、協力関係とネットワークの充実を図ることが確認された。

3-4. 写真

第1日



23 Love Lane にて集合



ジョージタウン視察



George Town world Heritage Inc. を訪問



参加者、潮州会馆にて



Khoo Salma Nasution (Penang Heritage Trust)



Ms. Lim Chooi Ping (George Town world Heritage Inc.)



Dr. Gwynn Jenkins



Lim Chung Wei (George Town world Heritage Inc.)



Ho Sheau Fung (Penang Heritage Trust)



Tan Yeow Wooi (Tan Yeow Wooi Culture Research Studio)



Naziaty Mohd. Yaacob (University Malaya)



Sunitha Janamohanam (George Town world Heritage Inc.)



夕食会、Hai Nan Townにて

第2日



Eastern & Oriental Hotel



宗田好史 (京都府立大学大学院教授) Japan



岩井一郎 (社奈良まちづくりセンター) Japan



Professor Dr. A. Ghafar Ahmad (University Science of Malaysia)



Catrin Pratihari Kubontubuh
(Indonesian National Heritage Trust) Indonesia



Yongtanit Pimonsathean (ICOMOS) Thailand



Professor Long Yuan (Huaqiao University) P.R. China



Moe Moe Lwin (Yangon Heritage Trust) Myanmar



Yenny Rahmayati (Heritage Community Foundation) Indonesia



Pranee Sakulpipatana (Phuket Community Foundation) Thailand



米村博昭 (社奈良まちづくりセンター) Japan



YAM Sokly (Khmer Architecture Tours) Cambodia



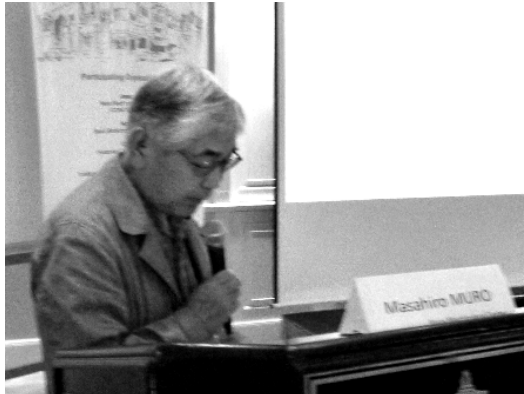
Alice Chiu (Institute of Historical Resorcess Management) Taiwan



Nuttakorn Vititanon (UDIF) Thailand



Manessaward Jintapitak (UDIF) Thailand



室雅博 (社奈良まちづくりセンター理事長) Japan



Joo-yeon Lee (Bukchon Culture Forum) Korea



Kyung-teak Lee (Bukchon Culture forum) Korea



Khoo Salma Nustion (President, Penang Heritage Trust)



スタッフ (Penang Heritage Trust)



Lim Guan Eng (Chief Minister of Penang, Malaysia)
潮州会館での懇親会にて



第3日



ミーティング (ペナン宣言、ネットワーク名称ほか)

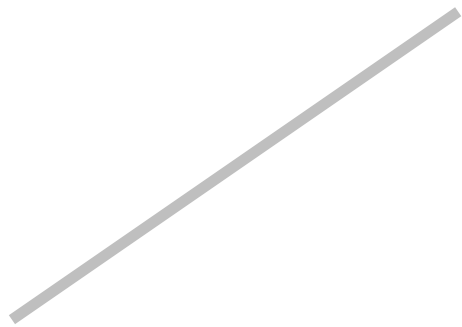




今後の戦略についての意見交換、ブレインストーミング



調印式、Penang Heritage Trust - Indonesian Heritage Trust



修復事例の視察、23 Love Lane



修復事例の視察、Chulia Lane house



4. 国際シンポジウムレポート

4-1. 国際シンポジウムの開催報告

(社) 奈良まちづくりセンター(NMC)は、1991年に始まるマレーシア・ペナンの町並み保存の支援を皮切りに、これまで約20年間にわたってアジアとの国際交流、連携・相互支援を進めている。そのアジアネットワークの20年余りの活動総括と、グローバル化に対応した未来への提言をテーマに、2013年1月12日～14日、マレーシアのペナン(世界遺産都市)でまちづくり国際シンポジウム「Urban Conservation Network in Asia and Its Future –Heritage, Cultural Identities and Asian Dynamism –」を開催した。

シンポジウムは、NMCとペナン・ヘリティジ・トラスト(PHT)が協働して開催したものである。アジア9ヶ国・地域、20団体が一同に会して、アジア各地の町並み保存の現状報告を行い、歴史的町並みとそこで営まれるコミュニティをいかに守るか、アジアの町並み保存の未来像はいかにあるべきかについて、熱いディスカッションを行った。

会議は、ペナンのジョージタウンにあるE&Oホテル(EASTERN&ORIENTAL HOTEL)や潮州会館(Penang Teochew Association)などを会場にして行った。シンポジウム2日目の会議には120名が参加して、交流懇親会にはペナン州首相(LIM GUAN ENG Chief Minister of Penang, Malaysia)の来賓も頂いた。3日間の公式プログラムでは、連日、早朝から深夜まで、びっちり各団体からの報告やディスカッションを行った。1分刻みで時間を大事にするほどの中身の濃いもので、各団体からの発表時など、持ち時間の3分前や時間切れの時に、「チン・チン・チン」とベルが鳴らされ、発表者・発言者は、「ああ、もう時間」と苦い顔をして、それを見た他の参加者が笑って、和むような場面も多々あった。

最終日には、NMCから提案したまちづくりの宣言文(案)をたたき台にして「ペナン宣言」を議論した。また、各国・地域の団体間のネットワークを今後推進するに当たり、何を目的に、どのような協働事業を行い、どうやって行っていくかをテーマに、ワークショップ的に議論を行った。そして、これまでのネットワーク組織「アジア西太平洋都市保存ネットワーク」(The Asia and West-Pacific Network for Urban Conservation - AWPNUC)を拡充して、新たなネットワーク組織「アジア・ヘリティジ・ネットワーク」(Asia Heritage Network - AHN)を創設することを参加団体の間で締結した(ネットワークの組織名を決めるに当たっては、各国・地域の団体メンバーからいろいろな名称のアイデアが出され、最終的には多数決で決定したが、名称の省略名をホームページでチェックしたところ、同じ略称名が全く異なる分野で多数でできて、笑いの渦で盛り上がった)。当初企画にはなかったことだが、PHTとインドネシア・ナショナル・ヘリティジ・トラストが交流の協定書(覚書き)を締結することになり、NMCが立会い署名した。

主催したNMCのメンバーとともに、アジア各国・地域からの参加者は、皆誰もが、限られた時間の中で互いに一生懸命に学び合い、新たな何かを求め合おうとした。互いに意気投合し、意識を共有できた時には感動し、笑い合った。また、日頃の悩みをぶつけ合って、涙を流しながら話し合う場面もあった。会議前日を含めて毎晩に行った交流懇親会も楽しく盛り上がり、アジア各国・地域の団体間の信頼関係の構築に厚みを持たせることができた。今後の連携・交流推進の一手段として、インターネットを上手

く使っていこうという話も団体間でまとまった（個人レベルでも、「これからネットで情報交換しよう！」、「フェイスブックある？」と聞きあう場面もあった。会議後しばらく経った後もメールやフェイスブックなどで意見交換を続けている）。そして、会議が終わった後、最後にお別れする時には、互いに抱き合っ分かれたりもした。

各国・地域でまちづくりを担っている各参加団体のメンバーは、日本に比べると比較的年齢が若く、日本のまちづくりの課題である「世代交代」の必要性を改めて痛感するものであった。マレーシアの現地で国際会議のセッティングを担ってくれたペナンのスタッフは若者が多く、たくさんの地元大学生のボランティアが目を見せながら生き生きと裏方作業を担ってくれた。

私たちのまちづくりのアジア交流は、20年ほど前（1991年頃）に、NMCのメンバーがマレーシア・ペナンの町並み保全活動を支援すべく、PHTの立ち上げ支援、ノウハウ提供、資金提供、国際会議（第1回）の開催などを、トヨタ財団の助成金などを得て行ったことがネットワークの始まりであった。それが20年経って、9カ国・地域、20団体の参加で国際会議を開いて、新たなネットワーク「アジア・ヘリテージ・ネットワーク(AHN)」を拡充・創設できるに至った。最初のきっかけは、本当に小さな活動であったが、一步一步前へ踏み出し続けることで、少しずつ大きなものになっていった。ペナン（ジョージタウン）が2008年にユネスコの世界遺産に登録されたが、それは、ペナンの有志とその仲間たちが20年前に蒔いた種が成長して実ったものであった。20年前に第1回の国際会議を開いた際に、「ユネスコに登録できないかな」、と夢物語を語っていたのである。

今瀬 政司（社団法人奈良まちづくりセンター会員、
特定非営利活動法人市民活動情報センター代表理事）

4-2. 激動のアジアに浸透する「街を守る」共通認識

経済成長が著しく都市化するアジアの都市で、建物や町並みなどの歴史遺産の破壊が進みつつある。危機感を持った9ヶ国・地域のNGOなど20団体、約120人が2013年1月12~14日、世界文化遺産(2008年認定)のマレーシア・ペナン島ジョージタウン(会場は潮州会館とE&Oホテル)で国際シンポジウムを開いた。社団法人奈良まちづくりセンター(NMC)がトヨタ財団の資金援助で主催し、ペナン・ヘリテージ・トラスト(PHT)が共催し、正式名称はUrban Conservation Network in Asia and Its Future(アジアにおける都市保全ネットワークとその未来)、メインテーマはHeritage, Cultural Identities and Asian Dynamism(歴史遺産、文化の個性とアジアのダイナミズム)であった。アジアの各都市の交流は1991年に始まり、Asia and West Pacific Network for Urban Conservation(AWPNUC=アジア・西太平洋地域都市保存ネットワーク)として8回のシンポジウム等を開いてきた。今回の参加団体らは、新たにAsia Heritage Network(AHN)を結成し、今後数年おきに会議を持ち、連携を強化することになった。発表や討議で得られたものは、地域の歴史や伝統に育まれた美しい景観や建物やそこに生き続ける多様な個性的な技能や文化、コミュニティを大切にすることが真の豊かさを産み出すという共通認識であった。

1) 伝統的な文化や工芸の再生に取り組むペナン

日本からは室雅博理事長らNMCのメンバー7人とイコモス(国際記念物遺跡会議)のメンバーの宗田好史・京都府立大教授の計8人。それ以外は以下のとおりである。韓国ソウル市の北村文化フォーラム▽中国・アモイ華僑大学の龍元教授▽台湾歴史資源経理学会▽カンボジアのクメール建築ツアーズ▽ミャンマーのヤンゴン・ヘリテージ・トラスト▽タイは4団体、タイ・イコモス▽チェンマイ都市開発研究財団▽クリエイティブ・アーバン・ソリューション・センター▽プーケット・コミュニティ基金▽インドネシアからは、インド洋大津波の被災地であるアチェを始め地方都市で活動する団体など大挙して6団体が参加した。インドネシア・ナショナル・ヘリテージ・トラスト▽アチェ・ヘリテージ・コミュニ



ショップハウスを見学する参加者たち

ティ基金▽バダン・ワリサン・スマトラ▽パン・スマトラ・ネットワーク▽ジョグジャ・ヘリテージ・ソサイエティ▽パグユバン・カク&ニング・スラバヤ。地元マレーシアは共催のPHTのほか、レストリ・ヘリテージ・ネットワーク▽ジョージタウン世界遺産法人▽ペラック・ヘリテージ・ソサイエティの3団体。

初日の12日は、数班に分かれてのジョージタウン市街地の視察と、世界遺産都市ペナンの取り組みの発表が中心であった。筆者は2006

年にもペナンを訪れたが、当時コーヒー工場だったところが、今はお洒落な喫茶店に変わっていた。ショップハウスの壁際にはアイアンワーク(鉄線を使って絵画のようにする)で市民の暮らしを表現した芸術作品が数多くできていた。われわれも「23ラブ・レーン」という古民家(本館)やショップハウス

(別館)を改装したホテルに泊まったが、こうした伝統的な建物を使ったホテルや民宿が増え、欧米系を中心に宿泊客でにぎわっていた。そして何よりも、ジョージタウンぐらいの日本の都市なら必ずあるような全国チェーンの飲食店、コンビニ、スーパーなどの看板や広告がほとんど無かったことが印象的だった。売っているのは国際商品であっても、商店はあくまで地元住民が主体的に経営しているようであった。

初日は、地元ペナンの当事者からの発表が中心。若者の参加の多さ、資金集め、そしてさまざまな調査、古民家やショップハウスの改修、すぐれた街並みや古民家を生かした教育文化活動などペナンは群を抜いて活発であり、毎年6、7月には存続があやぶまれる伝統的な儀式や工芸、芸術などの復活、建物訪問などを内容とするフェスティバルを開いている。関連する貴重な情報はデータベース化され、ナレッジ・バンク（知識銀行）保存されている。とくに注目するのはRevitalizing intangible cultural



クー・サルマさん（左端）と若いボランティアたち＝ホテル23・ラブレーン

heritage（無形文化遺産の再生）への取り組みである。生活に根ざした伝統工芸や職人、祭りなどの文化といった無形遺産は、世界的なものもあれば、コミュニティの中だけで生きるものまでレベルはさまざまである。それを調べるため、200人以上の若い調査員が調査方法の訓練を受け、そこから選ばれた約100人が世界遺産地区の約5千軒を訪ね、職人や住民などから3400件の聞き取りを行い、パソコンで入力し、さらに20件を選択し、対象者の言語でインタビューし、写真やビデオなどに記録を

残したという。

2) コミュニティ自体が文化遺産である

せつかく世界遺産に認定されても街並みや建物だけを残しても意味は無い。2日目(13日)の発表で、歴史遺産都市のアジアのネットワークづくり作りに長年奔走してきた岩井一郎NMC理事は、世界遺産都市になりながら、住民が住まなくなった欧州の都市や、住民を立ち退かせて町並みを整備した中央アジアの都市の例を紹介した。

宗田教授の基調講演「世界文化遺産の保全4分野における新しい潮流」でも、住民こそが「遺産の管理人(custodian)」という考え方が強調された。同教授は、脱工業社会を迎えて、文化遺産の定義付けも、記念物→景観、建物→都市エリア、遺跡→歴史的環境・文化的遺産、「遺産のあるコミュニティ」→「コミュニティこそ遺産である」、社会的機能も「国民的な統一性」→「文化的多様性の尊重」、「観光客からの収入」→「より広い意味の経済的利益、社会的な利益をもたらすもの」といった変化がおきつつあることを強調した。国家や当局者だけが何事も決めるのではなく、地域社会における民主的な決定や市民参加が重要となり、遺産を守る人材も、単独の学問分野の「専門家」より、多彩な専門性を発

揮する人や、それをとりまとめるファシリテーター（進行役）の役割が大きくなるという。

文化遺産の第一の“管理人”は所有者や住人であり、それを取り巻くコミュニティは、それを守り環境を維持する第二の管理人、その周辺の市民は、決定権を持つ政治家や地元の経済社会に影響力を及ぼす第三の管理人、買い物や飲食で経済的に支える旅行者は、第四の管理人という位置づけとなる。産業都市から個性的な都市への転換には、古い共同社会からくる芸術や工芸、創造性といった伝統文化を生かすことがカギとなり、そのためには、教育や社会開発で人材を生み出すことが不可欠である——というのである。

3) 「地価が騰貴し、文化遺産が守れない」

各国の発表にもコミュニティ重視の考え方が込められていた。インドネシアは、今年 2013 年を「ヘ



AHCFのイエニーさん

リティジ・イヤー」とし、「地域福祉のための文化遺産」というテーマで動き始めている。バンダアチェ、パレンバン、デンパサール、ジョクジャカルタなど 10 都市をパイロット・シティに選び、遺産の保全をコミュニティの活性化に生かそうとしている。今回のシンポの最後には、PHT とインドネシア側の団体が連携協定を結び、室NMC理事長が立会人を勤めるなど機運が高まっている。しかし、インド洋大津波後 8 年の歩みを発表したアチェ・ヘリティジ・コミュニティ基金のイエニーさんは、政府は地方の研究機関や組織を公認せず、政府の計画外に置いていること、政府や民間団体、大学、地

域グループなどのコミュニケーションが欠けていること、文化遺産を保存するための強い法規制が無いなどの問題点や課題を指摘していた。

国際化が遅れたミャンマーやカンボジアでは最近、高層ビルなどが増え、急速な都市化が進んでいる。地価が騰貴し、ミャンマー最大の都市ヤンゴンでは「地価が上がって保存が難しくなった」（ヤンゴン・ヘリティジ・トラストのモモさん）、「地価は東京と同じ。高い建物の間が 1m なんてところもある。欧米諸国が不景気だから投資がアジアに向かっているせいではないか」（クメール建築ツアーズのヤムソルキーさん）と、歴史的な都市景観が危機的な状況を迎えているという。本来は「韓屋」という韓国独特の住宅が立ち並ぶソウル市の北村（プッチョン）では、観光地化で平穏な住民生活が乱され、「静かな観光キャンペーン」（北村文化フォーラム）が行われている。

4) NMC作成の「ペナン宣言」草案を討議

最終日 14 日は、NMC の岩井理事が作成した「ペナン宣言」草案をたたき台とする討論と、「今後の戦略」を話し合うワークショップが開かれた。草案は、経済のグローバル化の中での急速な変化が起きているアジア歴史都市の危機に対する基本的な認識と姿勢を確認するものであった。都市エリアの破壊を止める行動をとろう▽伝統的な暮らしやコミュニティを守ろう▽少数民族などの文化的個性や多様性を尊重しよう▽多様な意見を持つ市民の参加により柔軟で大胆な保存計画を立てよう▽住民の生活と

ツーリズムの調和を図ることは文化交流の重要な要素である▽文化遺産を自然災害から守り災害に遭った地域を互いに支えあおう▽以上のことのためにアジアのNGO 強力なネットワークを確立しよう——という内容である。

結論には達しなかったが、「ネットワークに加わっていないが重要な役割を果たしている住民が多くいる」「NGO という言葉にアレルギーを持つ政府もある」「国家的財産の保存に連動している現行の法律をコミュニティ・レベルの遺産を守る新しい法律にアップデートする必要がある」などの意見が出た。筆者も「歴史遺産を投機対象にしないよう求める意見を表明すべきだ」と提案した。ワークショップは3つのグループに分かれて討議し、「フェイスブックなどソーシャル・ネットワーク・サービス(SNS)を使い若い世代をひきつけよう」「各地のお祭りや行事を載せたカレンダーを作ろう」「情報・知識・資源のデータベースを創ろう」などの意見が発表された。

現代は「機械文明」と言われ、先端的な産業技術ばかりがもてはやされている。しかし、それは一度



快適なショップハウスの室内

設計図を作ればコピーを大量に生産できる、意外と底が浅く、脆弱な性格を持っている。しかも、技術の所有者がそれを使う者を支配する構造がある。デジタル化はその傾向を一層強めている。それに対し、伝統的な技術は、人間自らの体の一部としてそれらを磨き、生活を築いていくというものである。創意工夫を何代も何代も積み重ねて、生活を豊かにする手段を磨き上げていくものである。たとえば、ショップハウスは、風通しを良くし天井が高いため熱がこもらない工夫がなされている。電気仕掛けの機械装置やエネルギー

消費に頼る機械文明とは対照的な知恵の塊である。ペナンに集まった人たちはそうした価値観を共有し、今回のシンポを通じて、そうした認識への確信を深めたのではないだろうか。

神野 武美（社団法人奈良まちづくりセンター会員、フリーライター）

5. 未来への展望

5-1. アジアの歴史的町並み保存の新たなネットワークに向けて

1) これまでの総括

歴史的町並み保存のアジアネットワーク「アジア西太平洋都市保存ネットワーク(Asia and West Pacific Network for Urban Conservation - AWPNUC)」は1991年に、日本、マレーシア、インドネシア、タイ、台湾、シンガポール、ベトナム、オーストラリアなどのNGOにより結成され、これまで、アジアの市民主体の歴史的町並み保存に大きな役割を果たしてきた。まず、その歩みを「創設期」と「拡大期」に分けて振り返ってみたい。なお、この小論でいう「アジア」とは、主に東アジアと東南アジアを指すが、ネットワークの活動範囲としての運動論の概念であり、地理的な範囲は必ずしも厳密でない。

a. ネットワーク創設期(1991年～1999年)

1991年に結成された当時は、NIESやASEANの経済発展が注目される一方で、その歴史的町並みの重要性に目を向ける人々は少なかった。そういう中で、アジアネットワークは、アジアの歴史的町並み保存の必要性を市民や行政に訴え、マレーシアのペナン、マラッカ、インドネシアのジョグジャカルタ、台湾の台北など、歴史的価値が高い町並みの市民主体の保存策の確立に大きな役割を果たした。アジアネットワークのメンバーは、1991年ペナン、1993年オーストラリアのアデレード、1994年にベトナムのハノイ、1995年に奈良、1997年に台湾と、持ち回りで国際シンポジウムを開催し、各地の活動報告やノウハウの交換を行い、各地の市民や行政へその重要性の周知に努めた。

当時、アジア各地は経済発展に沸き立ち、町並み保存は社会の中でマイナーな存在であったが、ネットワークのメンバーは、アジア各地で歴史的町並み保存運動の萌芽が生まれたことに勇気づけられるとともに、町並み保存NGOの先駆者としての誇りを胸に活動を続けた。先駆者ゆえに各地域での活動は手探りであり、資金繰りや行政の理解など困難が伴ったが、シンポジウムに出席するたびに、アジアの他地域のエキゾチックな町並みと熱心で個性ある活動に感動し刺激を受ける、そんな時代であった。

b. ネットワーク拡大期(2000年～2012年)

アジアネットワークのシンポジウムが一巡したころから、(社)奈良まちづくりセンター(NMC)は独自の交流事業を模索し、2003年からタイのチェンマイとの交流を開始、2005年からはインド洋大津波被災地であるインドネシアのアチェの文化遺産復興を支援、2009年からは韓国のソウルや中国の研究者との交流を開始するなど、独自のネットワークを拡大した。ペナンのリーダーであるクー・サルマ氏は2004年にレスタリという新たなアジアネットワークを創設し、その他2000年代に入って、インドネシアなど東南アジア各地で、町並み保存を目的としたヘリテージ・トラストが多数結成された。いわばネットワーク自体が重層化し多様化した時代だといえる。こうした中、1998年に奈良が、2008年にはペナンとマラッカが世界遺産登録されるなど、歴史的価値の高い町並みにおいては、保存活動は一定定着し、町並みを活用したツーリズムも飛躍的な発展をみせた。東アジアと東南アジア全体の町並み型世界遺産の数は、2012年までに30件近くに急増し、人々の理解も深まり、歴史遺産を活用した市街地の再編成は、アジアのみならず世界的な潮流となった。

その一方で、中国を初めとする新興国においては、かつての日本のように、経済の高度成長が継続す

る中で、歴史的に形成された人間生活の場としての伝統的なコミュニティは破壊され、都市の個性の源たる、民族性、地域性、歴史性は急速に失われ、ガラスと鉄の超近代都市空間が地方小都市まで浸透した。いわば保存が確立し伝統を固持する保存都市空間と、伝統と全く切り離された現代都市空間の分化が進行した。こうした状況のもと、少数のエリート的町並みにおける保存もむろん重要ではあるが、それ以外の都市においても、伝統と極端に切り離された都市更新ではなく、生活文化を醸成してきた歴史的コミュニティを継承する必要がある。経済のダイナミズムの中で、伝統生活の場としてのコミュニティを維持発展させるために、ダイナミズムに配慮した緩やかな保存手法が求められている。また、現在のグローバル経済は強力で、都市空間を金融商品化し、短期間に全面的に更新するパワーを有しているため、市場経済の導入による急速な町並み破壊が予想される新興国に対して、予防のための保存システムの確立が急務となっている。さらにアジア各地で文明の衝突といわれる紛争が跋扈する中で、また、政府間の関係が必ずしも良好といえない中で、それぞれの民族や国家のアイデンティティを尊重し、共存の場として町並み空間を評価する視点が求められている。

2) 今回のアジア隣人プログラムの成果

アジアの歴史的町並み保存においてこのような視点が求められている中で、新たな方向性を示すために、今回のNMCのアジア隣人プログラムは企画された。そのキーワードは、副題にある「歴史遺産の活用」「民族アイデンティティの継承」「アジアのダイナミズム」である。ペナンにおけるメインシンポジウムの直前には、新興国のミャンマーを予備調査し、最大の都市ヤンゴンの町並み保存のために最近設立されたヤンゴン・ヘリテージ・トラストの活動状況を調べた。

メインプロジェクトとしてのペナンシンポジウムでは、まず、今やアジアの歴史的町並み保存の先進地となったペナンから、これまでの活動の総括と現在の取り組みの紹介があった。各民族の歴史遺産を活用した「遺産教育プログラム（アナック・アナック・コタ）」、長老のオーラルヒストリーを記録保存した「ペナン・ストーリー」、現在取り組んでいる「生活無形遺産（インタンジブル・ヘリテージ）の保存」など、世界的に見ても最先端といってよい取り組みが紹介された。また、1991年のネットワークの提唱者のひとりである宗田教授が、これまでの世界の歴史的町並み保存の展開を整理し、アジアネットワークの位置づけを解説した。さらに、アジアネットワーク結成の初期から活動に関わっている筆者が、これまでのネットワークの活動を振り返るとともに、それら努力にもかかわらず、現在も急速な町並み破壊が進む状況に対して警笛を鳴らし、今後のアジアの町並み保存に対して問題提起を行った。これらの報告により、今回初めて参加したグループや若い参加者も、アジアの現状を把握するとともに危機感が共有できたと思う。その後で、アジア各地の歴史的町並み保存団体が、それぞれの特色溢れる活動現況と保存現場の現状の紹介を行った。

これら過去の総括と現状を踏まえて、今後のアジアの町並み保存のあり方について、本質的なディスカッションを行った。ディスカッションでは、NMCが準備した「ペナン宣言案」を元に、新興国の保存システム確立支援、多民族のアイデンティティの尊重、アジアのダイナミズムの反映など、保存の本質的な課題に対して、各国の立場の違いを踏まえて意見交換を行った。残念ながら宣言の公布には至らなかったが、参加者間でおおむね問題意識を共有することができた。多様な文化的背景を持つアジアの団

体が一堂に会する中で、町並み保存の原則を確認しあつた意味は大きい。

ペナン宣言が公布されなかった理由は、NGO 主体という点において、ミャンマーや中国など政治状況の異なる国の参加者の合意が得られなかったためだが、今回ミャンマーから2名特別招待し、中国からも研究者を1名招待した意義は大きかった。それは世界最大の規模で都市開発が進む中国抜きでアジアの歴史的町並みは語れないし、ミャンマーなどの新興国では市場経済の導入前に保存システムを確立する必要があるためである。政治状況の違いを考慮した有効な支援策の重要性が、ディスカッションの中で改めて浮き彫りとなった。

最後に、ソーシャルメディアを最大限活用したネットワークの可能性についてディスカッションを行い、新たな町並み保存ネットワーク「アジア・ヘリティジ・ネットワーク」がその日から創設された。これは、フェイスブック会員間のクローズドなネットワークであるが、状況の異なる様々なアジアの町並み最新情報が多数集まり、有意義な情報交換の場を提供している。

公式のディスカッションだけでなく、シンポジウム終了後のパーティーでの様々なイベントやエンタテイメントも交流を深める上で有意義であった。多文化都市ペナンはそのために最高の場を準備してくれた。それぞれが抱える政治状況も、文化の違いも、言語の違いも吹き飛ばす大らかな雰囲気がこの都市にはある。経済のグローバル化は都市空間の大変貌をもたらしたが、一方では国境をほとんど意識せずに交流できるようなボーダーレスの状況をもたらした。政府間の状況がどうであれ、民族紛争が多発する中であれば、市民同士のネットワークはもっと自由で、自発的で、創造的であってよい。町並み保存という人間の暮らしの根本をテーマとする市民交流が、アジアの硬直化した政治状況や根強い相互不信を払拭するきっかけとなることを願う。

3) アジアの町並み保存の未来展望

新たなアジアネットワークにおいては、市民同士が連携して、政治状況の違いに配慮しながら、民族性、地域性、歴史性が尊重されるような国際交流の仕組みが重要となろう。最後にシンポジウムの成果を踏まえて、アジアの町並み保存の未来を展望する。

今後の町並み保存を展望する際に重要な点はまず、ミャンマー、インドネシア、カンボジア、そして中国も含めた新興国の町並み保存の支援である。今後予想される経済発展を考えれば、町並み保存策の確立は急務であるが、単に規制強化による固定化した保存ではなく、町並み保存が住民の生活改善にもつながり、文化の振興にもつながるような、経済発展と両立した仕組みが求められる。今回のプログラムでは新興国の町並み保存のモデルにまで踏み込んで提案を行いたかったが、残念ながらそこまでの議論には至らなかったため、今後実践を通して模索していきたい。新興国への支援においては、各国の政治状況や経済発展状況に応じて、市民間の交流だけでなく、政府への働きかけや研究者との連携なども含めて、あらゆるチャンネルを通じた支援策を行うことが、伝統に依拠した新たな発展モデルの確立につながる。

次に重要な点は、アジア各地に台頭する若い世代の影響力である。アジアネットワークの20年を超える歴史の中で、アジア各地のNGOではスタッフの世代交代が急速に進んでいる。今回ペナンシンポジウムに参加した若い世代は、国際性、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力、企画運営能

力などの面で、これまでの世代より優れていると感じた。これら世代の能力を最大限発揮させることができれば、さらに自由で、オープンで、しかも実務遂行能力を備えたネットワークに育つものと思う。

さらに重要な点は、各国のNGOの意欲溢れる主体性である。発展途上国や中進国のNGOは、かつてのような単に援助を待つNGOではない。むしろ先進国のNGO以上に活動力があり、想像力に溢れ、企画力と構想力に富む組織が増えている。そういう状況にあっては、富む国が貧しい国を援助するという考え方ではなく、むしろ発展途上国側のNGOの豊かで柔軟な発想を引き出し、それを先進国側が側面から緩やかに応援するというくらいのスタンスが望ましい。今回のペナンでのイベント直後に、次回はインドネシアで開催したいという意向表明があったという。韓国の若い参加者からは次々回はソウルでという提案もあった。そのポジティブな姿勢には学ぶところが大きい。アジア各地で主体的で能動的で斬新な取り組みが多数生まれ、それらが重なり合い補い合う、そんな新たなネットワークの姿が徐々に見えてくる。その芽を大きく強い大木に育てることができれば、世界の町並み保存をリードするような新たなムーブメントをアジアから発信することができよう。

今世界の文明の流れが、大きく欧米からアジアへ、先進国から新興国へ、シフトしつつあり、歴史的町並み保存の新たなアジアネットワークは、広くそういう大きな潮流の中で構想する必要がある。それは、欧米中心の都市計画理念からの脱却でもあり、開発から保存へ、政府主導から市民主体へ、そして、分断から交流へ、文明の衝突から共存へという、都市計画の新たなパラダイム実現への第一歩である。

岩井 一郎（社団法人奈良まちづくりセンター理事）

5-2. 「アジア太平洋地域の文化遺産、文化的アイデンティティ、そしてダイナミズム」

2012年1月12日にペナンで開催された本事業の一環であるシンポジウムに参加し、標題の講演を行った。その内容と一部は重なるものの、新たにネットワークの現在と未来を述べる。

アジア西太平洋都市保存ネットワークは、1991年にペナンで開催された国際連合地域開発センター(UNCRD)主催ペナン市政府共催によるワークショップ「アジア大都市の開発と保全」に参加したマレーシア、インドネシア、タイ、インド、中国、日本の専門家及び市民団体の代表等によって設立された国際ネットワークである。その後、ユネスコ・アジア太平洋オフィス(バンコック)、トヨタ財団等の支援を受け、加盟組織は20年以上にわたって交流してきた。その後、当初の6か国に、韓国、台湾、カンボジア、ミャンマーの4つの国と地域が加わった。今回も、インドネシアのように大きな国からは複数の州(地域)からの参加もあった。特に、若く新しいメンバーが多かったことが印象に残った。

いうまでもなく、この20年間、東南アジア諸国の経済発展は急速であった。しかし、それぞれの国の成長率には大きな差があり、社会発展の程度にも違いがある。1990年当時もすでに小さくはなかった所得格差がより拡大した国が多い。一方、中間所得層は着実に増え、教育水準は上がり、市民社会の活動も発展した国が多い。

経済成長の結果、大都市ばかりか地方中小都市でも急速な開発が進んだ。市民生活、生産活動が変化し、伝統的な町並みの多くも失われた。人々の生活と就業の変化は、主に工業開発によるもので、電化製品や自動車の普及とそれを支える大規模インフラ整備が都市と農村の社会を根底から変えた。加えて、この10年間の情報通信技術の急速な普及の影響で若者を中心に広がった新しい市民社会の萌芽が、人々の意識を変えていると思われる。

東南アジアの国々では、もともと若年人口が多い。教育水準が上がり、ITリテラシーも高い若者には世界の情報が瞬時に伝わり、自らもまた膨大な情報を発信する。半世紀前に日本の若者が経験した経済成長と、情報化が進化した若者が経験する経済成長では、その影響にも違いがあるだろう。会議の参加者に若者が多かったとはいえ、彼らだけから全体の傾向を見ることはもちろんできない。しかし、地域の伝統文化や歴史的町並みに高い関心を示す若者が増えたことは注目に値すると思う。比較にならないほど高齢化率が高い日本と比べれば当然ではあるが、会議で町並み保存を語る参加者の若さゆえに、20年前とは明らかに異なる雰囲気があり、新たな町並み保存の目的意識が感じられた。20年前との違いとは、失われたものへの郷愁はかなり薄く、かつての急速な開発への危機意識も嫌悪感もほとんどなく、歴史文化遺産を守るというより、個性的な地域文化を生み出そうというより盛んな意欲だったと思う。端的に言えば、保存より創造、地域の伝統文化の中に社会を発展させる資源があるという認識の広がりではなかったかと思う。

経済成長で国民所得が上昇、生活水準と進学率が上がった。そのため、問題を抱えてはいるものの多くの国で民主的な政治体制が着実に進展し、市民活動も発展した。市民活動は、もちろん文化遺産や歴史都市保存の分野だけではない。保存の分野も、過去半世紀以上にわたって欧米先進国や日本で進んできたものとは違う。会議の開催地ペナンは、すでに2008年ユネスコの世界文化遺産に登録されている。国際機関による支援があり、保存の仕組みや技術はすでに国際水準に達し、近隣諸国・地域に優れたモ

デルを示している。公開や参加も活発で、文化遺産行政機構の民営化にも取り組んでいる。様々な市民活動分野の中で最も開かれた仕組みを備えるようになったといっても過言ではない。

さて、2012年の国民総所得(GDP)と一人当たり(pro capita)名目GDP額は、概ね比例関係にあるが、中国のように人口が多い国では、プロカピテ額がまだ低い。逆に人口が比較的少ないマレーシアはその額は高い。その極端な例がシンガポールで、GDPプロカピテは日本を上回る。参加国では、GDPプロカピテが4万ドル以上の日本、2万ドル以上の韓国、台湾、1万ドルを超えたマレーシア、6千ドルの中国、やや少ない5千ドル台のタイ、3千ドル台のインドネシア、そして千ドルに満たないカンボジアとミャンマーの順で並んでいる(図.1)。ちなみに、1991年と比べると中国は17倍、マレーシアは4倍、タイが3.4倍、日本も1.6倍に増加している。つまり、マレーシアのペナンで1991年に始まったこのネットワークは、主要参加国のGDPプロカピテが3千ドルから1万ドルへ上昇した20年間に活動していたことになる(図.2)。

GDPプロカピテが2千ドルを越えると民主化運動が活発化し、1万ドルを越えると国の形、行政機構も変わるという見方がある。また、3千ドルを越えると急激な開発が都市景観を変えともいう。それに対して町並み保存も起こるが、保存の目的と方法論は、まずナショナリズム色の強い保存に始まり、第2段階では、民主化の進展とともに文化的多様性を尊重し、庶民文化・民俗、少数民族や農村文化への関心を高め、第3段階に進展すると文化的包括性(integrity)と文化的創造性(creativity)へと発展するという見方がある。日本に当てはめるとGDPプロカピテが千ドルに満たない戦前に始まった文化財保護が、戦後1950年に2千ドル台で現在の文化財保護法となり、5千から1万ドルを越えた1970年代に町並み保存を法制化し、3万ドルを越えた1990年代に登録制度ができ、景観法が制定された経過をたどることができる。現在の東南アジアの主要国のGDPプロカピテはまだ低いが、IT化で加速されたグローバル化の影響で、この経過を一足飛びに駆け抜けるかに見える。とはいえ、マレーシアやタイのように加速する国と中国のようにブレーキをかける国とがある。その理由は国々それぞれの社会の現実が異なっているからである。

違いは、まず国の成り立ちにある。マレーシアは参加国の中で代表的な多民族国家で、広大なインドネシアも、そしてタイも民族問題を抱えている。マレーシア連邦は、長年マレー人を優遇するブミプトラ政策を続け、文化面でもマレーと英連邦の文化遺産の保護とペナンなど中国系市民の文化遺産を分けて取り扱ってきた。1990年当時、バダンワリサン(マレーシア・ナショナル・トラスト)の活動は、ジョージタウンの華僑の文化遺産保護には決して積極的ではなかった。マレー文化優遇の国はある限り、華僑文化保護は分離独立運動を見られる恐れがあった。

それほど極端ではなくても、独立後の国民国家形成の努力が続く時代には国民文化の高揚に結びつかない文化遺産は政府の関心外にあった。首都から離れた辺境に住む少数民族の伝統文化や伝統的建造物への関心は低く、国家統合による迅速な開発を急ぐべきだという考え方が一般的だった。実際、インフラ整備を急ぎ、天然資源開発と工業化が進み、東南アジア主要国では辺境がなくなりつつある。同時に、独立後半世紀以上を経て、民族自立や分離独立への動きはすっかり沈静化した。民族の統合以上に、地域経済の統合と発展が進み、その果実の甘さが多民族国家の中で文化の意味を大きく変質させたのだと

思う。

多民族国家の文化政策とその進展については別の機会に論ずるとして、東南アジアの町並み保存に論を戻せば、第一段階のナショナリズムが第二段階の文化的多様性の尊重にシフトし、現在は第三段階の文化的包括性と創造性の発現に進みつつあるという見方ができると考える。今回の会議で最も関心を集めた地域はスマトラ島だった。西スマトラのアチェ（2005年に独立運動が終結）と汎スマトラ・ネットワークが、獲得した自治権を踏まえつつも分裂を乗り越えた緩やかな統合に向けた取り組みの一環としてスマトラの町並み保存を位置づけているという。2004年のスマトラ島沖地震の急速復興が、伝統的町並みを壊している問題も指摘された。

同様に、ペナンの人々の関心はマラッカ海峡両岸地域のババ・ニョニヤ（インドネシア語ではプラナカン、海峡華人ともいう、この地域に住み着いた中華系移民の末裔の人々）の文化を保存継承しようという点にある。今回も参加したプーケット（タイ）、アチェ、メダン（インドネシア）、マラッカがこの文化圏に属し、ジョージタウン（ペナン）、マラッカという二つの歴史都市が世界文化遺産に登録されている。英領だったこともあり、ババ・ニョニヤの若者には英国やオーストラリア、米国に留学する者が多い。市民活動や国際交流によく馴染み、歴史文化への関心も高い。加えて近くには、東南アジア有数の都市シンガポールがあり、国境を越えて広がる文化遺産保存のネットワークは、自立的ではないが包括的で、融合性の高い文化的特色の萌芽を感じさせるものだった。

今回の参加者では、特に注目を集めたわけではないが、タイ・イコモスを代表して参加したヨンタニ氏は、1962年のヴェニス憲章に代わる東南アジアの保存理念を準備していると語った。今回は参加のなかったベトナムと並んでタイはこの地域の大国である。また、日本など先進各国の協力で町並み保存がよく進んでいる国でもある。奈良まちづくりセンターのメンバーもタイではチェンマイの保存計画策定を支援した。マラッカ海峡地域とは別に、タイとベトナムは独自の文化と立派な町並み保存活動をもち、特にメコン5ヶ国の中で経済的、社会的そして文化的にも強い影響力をもつ。覇権を競っているとも言われる。両国とも世界遺産登録にも熱心で、文化遺産保護について欧米流では収まりにくい問題を抱えている。英仏独というEUの三大大国の国際協力を上手に受け入れたペナン、マラッカとやや違う保存技術、文化の独自性を模索しようという問題提起は、今後も関心を集めることになるだろう。

もう一つ、この20年間に東南アジア諸国では観光ビッグバンが起きた点に触れる必要がある。もちろん欧米や日韓中など域外からの観光客が増加したことは言うまでもないが、アセアン諸国の中で、まずシンガポール、次にマレーシア、そしてタイからの観光客が急激に増加した。GDPプロカピテの上昇で思いのほか早い富裕層の海外旅行ブームが起こったのである。アセアン市民は欧米や日本にも出るが、アセアン圏内の隣国に大量の観光客を送り出している。加えて、それぞれの国で国内観光客の増加も急速である。この観光ブームの中で世界遺産登録や町並み保存が進んでいる。実際、ジョージタウンだけを見ても、街中を歩く観光客の数は20年前の比ではない。

この観光の発達の影響にも興味深いものがある。これまでのUN・WTO等の研究では、発展途上国での観光開発の問題点が数多く指摘されている。もちろんいくつかの問題点は残っているものの、欧米でいう文化観光が現在では主流になりつつある。この10年にはブティック・ホテルと呼ばれる伝統的建造

物を活かしたプチ・ホテルが増加した。もはや大資本による大規模リゾートホテルが主流の時代ではなく、街中の町家ホテルが人気を集めている。中国や台湾などからはまだ団体観光客も来ているのだろうが、個人や小グループの滞在型観光が目立って増加し、欧米人観光客は言うまでもなく、アセアン圏内の若い観光客がヨーロッパの観光都市同様の過ごし方を満喫し始めている。その観光行動に応じた店舗や小博物館などが増え、保存された民俗文化の魅力が十分に活用されている。東南アジア全体にこの傾向が見られるわけではないだろうが、観光ビッグバンは量的な拡大だけでなく、質的な改善を進めた点を指摘してもいいと思う。

さて、UNCRD が研究・研修事業「アジア大都市の開発と保全」で国際ネットワークを提起した目的は、国際交流だけでなく民際交流で町並み保存を進める点にあった。町並み保存は文化財保護の一部ではあるが、所得上昇、生活水準の向上、民主化、個性ある地域の自立と発展など複数の課題とともに進むものである。そして、その原動力は地域住民、やがて成長する市民社会でもある。工業開発や流通・消費の拡大、観光開発に拮抗するだけの文化的自立性、アイデンティティの発展を獲得することが市民社会を発展させる。その発展には地域の文化資源の保全が不可欠になる。

この原点ともいえる基本認識は、今もう一度再確認されていいと思う。20年間のネットワークの活動は、この認識を備えた特定のリーダーに導かれたものではないだろう。より曖昧ではあるが一定の共通性ある認識をもった個々人が、それぞれの善意で活動に加わったに過ぎない。とはいえ、この基本認識にはある程度の普遍性があったために、その方向を外すことなく続いてきたといえる。

ネットワークに加わる都市と地域はこの20年間着実に発展してきた。それは経済成長だけでなく、文化的な発展でもあった。振り返って、変化がないように見える奈良の町が、この20年間大きな質的な変化を遂げてきたことを我々は再確認する必要がある。奈良の変化は見えにくいですが、同様に質的な変化がネットワークの各地で起こったことを丁寧にみるべきだろう。それぞれに異なる地域で発展した多様な市民社会に共通するものが見えてくるかもしれない。その共通点から発想して、町並み保存というアプローチが実現する未来の社会を展望することができる。

これまでにネットワークに参加した都市と地域の数はまだ限られている。今後、その数を増やしたいと願うメンバーは多い。その一方で、この活動の本質的な意味を発展させたいと思うメンバーもいる。

宗田 好史（京都府立大学大学院教授）

図 1 : 2012 年の GDP (国内総生産) と一人当たり名目 GDP (US ドル)

国	名目 GDP			一人当たり名目 GDP (US ドル)		
	単位 : 10 億 US ドル	前年比	順位	単位 : US ドル	前年比	順位
シンガポール	276.52	+1	8	51,161.60	+1	1
日本	5,963.97	-0.5	2	46,735.72	+4	2
韓国	1,155.87	-0.5	3	23,112.93	+3	3
台湾	473.97	-1	5	20,328.31	+2	4
マレーシア	303.5	+1	7	10,304.17	-1	5
中国	8,227.04	-0.5	1	6,075.92	+4	6
タイ	365.56	-2	6	5,678.48	-1	7
インドネシア	878.20	-0.5	4	3,592.29	-0.5	8
フィリピン	250.44	+4	9	2,614.16	-0.5	9
ベトナム	238.07	+1	10	1,527.95	+1	10
ラオス	9.22	+1	13	1,445.53	+3	11
カンボジア	14.24	+4	12	933.61	-1	12
ミャンマー	53.14	-0.5	11	834.60	-0.5	13

図 2

Economic Growth in Asian Countries

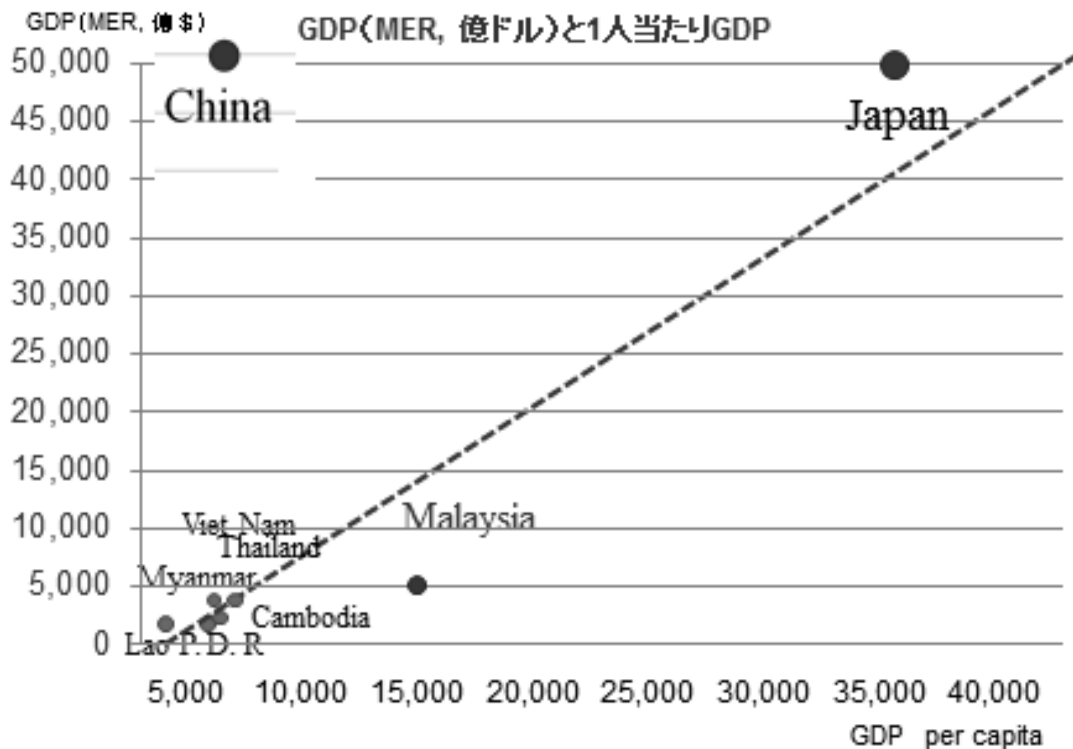
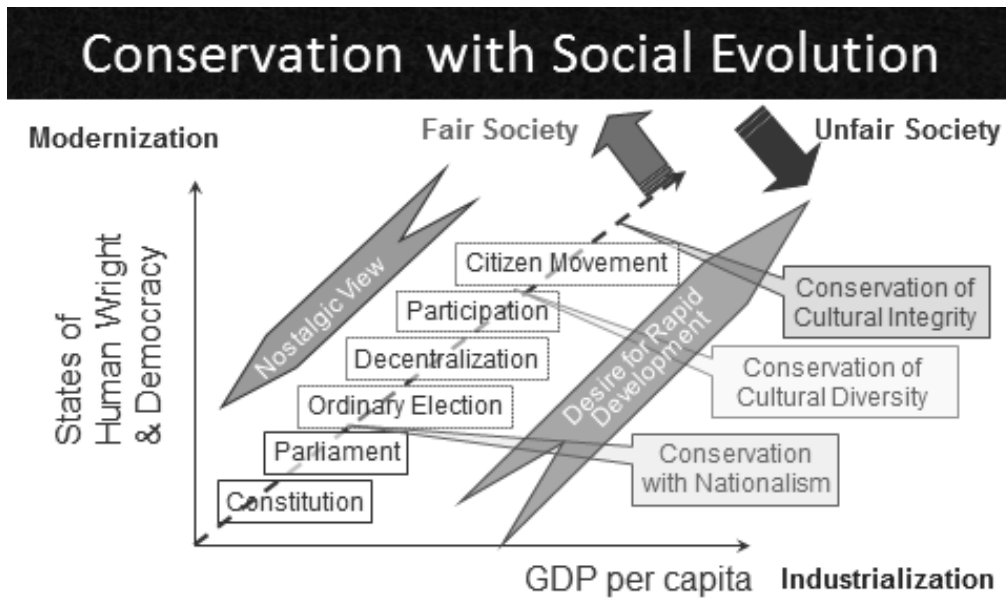
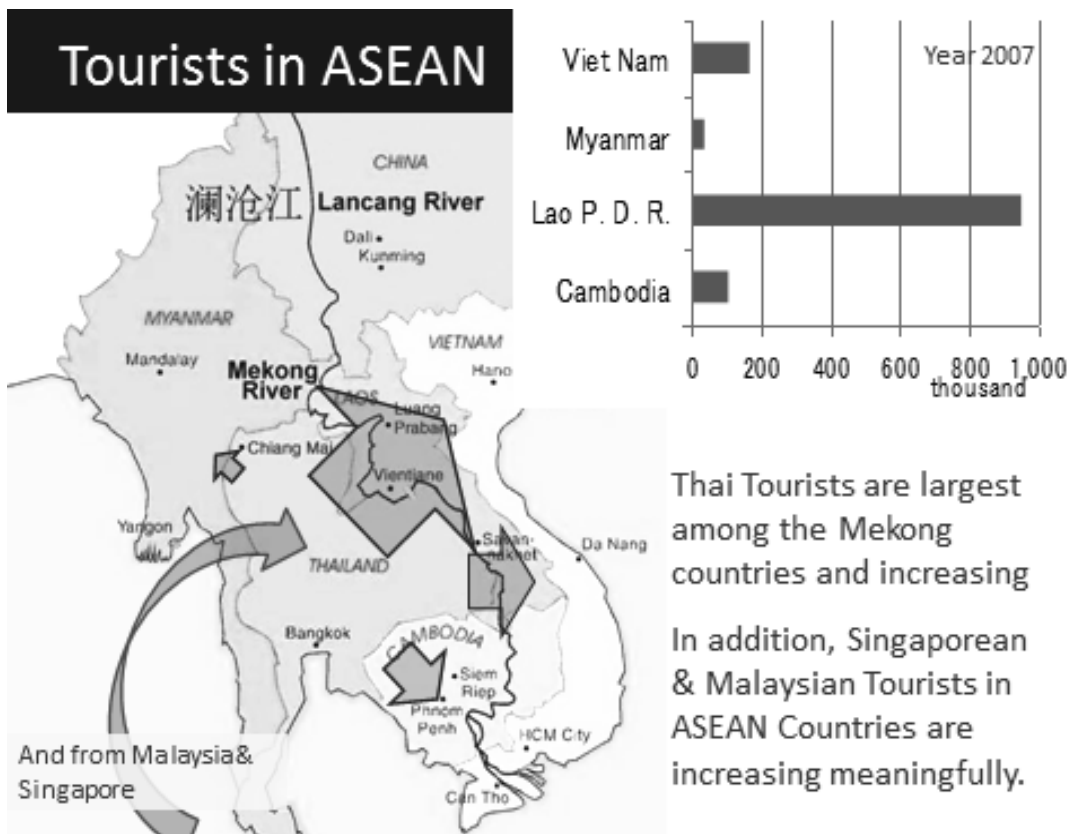


图 3



How manage the communities in evolving Society.
How conduct traditional value in lifestyle evolution.
How educate children in evolving society.

图 4



[資料編]

1. シンポジウム当日資料

資料原本は英語表記であり、表紙以外は日本語訳を掲載。

The Urban Conservation Network in Asia and Its Future:
**Heritage, Cultural Identities
and Asian Dynamism**



12-14 January 2013
George Town, Penang
Historic Cities of the Straits of Malacca, Malaysia
Venue : E&O Hotel and Penang Teochew Association
Organised by Nara Machizukuri Center, Japan
Penang co-organisers:
Penang Heritage Trust and Lestari Heritage Network
With the support of
George Town World Heritage Incorporated
and the Penang State Government
Made possible with funding from
The Asian Neighbors Program by The Toyota Foundation
and Think City Sdn Bhd
Drawings by Shibu Dutta



【表紙】

アジアの町並み保存ネットワークとその未来

—歴史遺産、アイデンティティの継承、アジアのダイナミズム—

2013年1月12日～14日

マラッカ海峡の歴史的都市群：ペナン・ジョージタウン（マレーシア）

会場：イースタン&オリエンタル ホテル、ペナン潮州会館

主催：（社）奈良まちづくりセンター

共催（ペナン）：ペナン・ヘリティジ・トラスト、レスタリ・ヘリティジ・ネットワーク

協力：ジョージタウン世界遺産法人、ペナン州

助成：トヨタ財団「アジア隣人プログラム」、シンク・シティー株式会社

表紙絵：シブ・ドウッタ

【2ページ】

このネットワークについて

アジア・西太平洋都市保存ネットワーク（Asia and West Pacific Network for Urban Conservation、AWPNUC）は、都市保全における文化的情報と技術的な専門知識の交換を目的に結成された。参加団体が活動する国々では、歴史・文化遺産、その後の近代的発展、都市のあり方、そして現在の都市が抱える問題や課題について、多くの共通した点が見られる。

AWPNUCは、極東地域、南アジア、東南アジア、オーストラリア、太平洋地域をつなぐユニークな文化組織として、これらの地域での歴史・文化遺産の保存において、重要な役割を担っている。参加者の多くは、町並み保存を推進、研究、実践しており、国際的なネットワークへの参加、あるいは出身国以外でのプロジェクトへの参加を積極的に行っている。

AWPNUCは、1991年に国際連合地域開発センター（UNCRD）の支援を受けてペナンで開催された「都市保全と市民参加に関する会議」（Urban Conservation and Public Participation）のセミナーの中で設立された。それ以降、参加団体が毎年持ち回りでシンポジウムを開催しており、毎回、二つもしくはそれ以上の団体が次回シンポジウム開催への立候補を表明している。

シンポジウム

第1回AWPNUCシンポジウム（マレーシア・ペナン）1992年8月15日～17日

主催：ペナン・ヘリティジ・トラスト

一般向けセミナー「遺産活用の経済的可能性」（The Economic Potential of Heritage Development）を併催

第2回AWPNUCシンポジウム（オーストラリア・アデレード）1993年4月28日～30日

主催：南オーストラリア・ナショナル・トラスト（National Trust of South Australia）

「より良い都市のために：都市保全における環境、経済、社会、政治および実践」（Working for Better Cities : Environment, Economic, Social, Political and Practical Aspects of Urban Conversation）

第3回AWPNUCシンポジウム（ベトナム・ハノイ）1994年11月7日～12日

主催：ハノイ市 協力：オーストラリア外務通産省「オーストラリア・ヘリテージ・コミッション」(Australian Heritage Commission)、南オーストラリア住宅・建設省 (SACON) ヘリテージ・ユニット (SACON Heritage Unit、現在の南オーストラリア公共サービス《Services SA》)

「変わりゆく古代都市：保全における課題」(Ancient Cities in Transition : The Challenges for Conversation)

第4回AWPNUCシンポジウム（奈良）1995年10月27日～30日

主催：(社) 奈良まちづくりセンター

「未来へ向けた継承と発展－歴史的町並みとショップハウスの生活文化」(Succession and Development of Historical Streets and Living Culture of Shophouses for the future)

第5回AWPNUC国際シンポジウム・ワークショップ（インドネシア・ジョグジャカルタ）1996年9月28日～10月1日

主催：ガジャ・マダ大学工学部建築学科 (Department of Architecture, Faculty of Engineering, Gadjah Mada University) 協力：国際交流基金

「よりよい生活と歴史的地域の存在」(Better Living and the Existence of Historic Areas)

【3 ページ】

第6回AWPNUC国際シンポジウム（台湾・台北）1997年11月21日～25日

主催：楽山文教基金会 (Yaoshan Cultural Foundation)

「草の根保存団体についての回顧と展望－その役割と成果」(Retrospectives and Perspectives of Grassroots Conversation Organizations : Roles & Achievements)

第7回AWPNUC国際シンポジウム（インドネシア・バリ）2000年7月

主催：AusHeritage（オーストラリア）、世界銀行

「持続可能な社会・環境・観光発展のための歴史文化遺産保存」(Conserving Heritage for Sustainable Social, Economic and Tourism Development) ※UNESCOとの連携により開催

2006年市民によるアジア遺産都市トライアングル支援事業（2006 Asian Heritage Cities Triangle project）（マレーシア・ペナン）2006年1月8日～10日

主催：(社) 奈良まちづくりセンター、レスタリ・ヘリテージ・ネットワーク、ペナン・ヘリテージ・トラスト 助成：国際交流基金、インスティテュート・フォー・カルチュラル・エンタープライズ (Institute for Cultural Enterprise、ニューヨーク・米国)

「出入り自由な教室としての都市：都市保全における多様性とダイナミズム」(The City as an Open Classroom: Diversity & Dynamism in Urban Conservation)

ペナン・ヘリテージ・トラスト (Penang Heritage Trust)

1986年に設立されたペナン・ヘリテージ・トラストは、ペナンの文化・建築遺産の振興に貢献する公益的なNGOである。ペナン・ヘリテージ・トラストは、ペナンの遺産の保存活動、文化教育プログラムの促進、そし

て同じ志を持つマレーシア内外の団体との連携を目的としている。ペナン・ヘリティジ・トラストでは、ペナンの伝統産業、コミュニティ、歴史的建造物の保護、またペナン中心部における活性化および文化的、経済的多様性の維持の必要性に対して、一貫して発信を続けている。

ジョージタウン世界遺産法人 (George Town World Heritage Incorporated, GTWHI)

ジョージタウン世界遺産法人は、ジョージタウンの遺産および同市の世界遺産の振興、監視、管理を目的に2010年に設立された。世界遺産の重要性をより多くの人に理解してもらうため、ジョージタウン世界遺産法人は遺産に関する計画立案、保存、管理を行う専門家や国・市の行政当局から、遺産に関連した教育・文化活動に携わる歴史家や芸術関係者まで、数多くの団体や個人とともに活動を行っている。また、ジョージタウン世界遺産法人では自らが持つ記録や資料、デジタル・アーカイブを活用し、遺産に関する様々な情報やリソースを提供している。

【4ページ】

2013年シンポジウムについて

アジア・西太平洋都市保存ネットワーク (AWPNUC) は1991年に設立され、参加市民団体は互いの体験やノウハウの交換をこれまで行ってきた。この20年間、これらの市民団体による都市保全の活動状況は前進を見せ、その結果いくつかの都市がユネスコの世界遺産に登録されるまでになった。一方で、アジアの都市が経済成長を経験しながらも、これらの都市の多くでは依然町並みや歴史的遺産が危機的状況にある。アジアのダイナミズムとともに歩むため、すべての歴史的地域を守り、それらの地域がグローバル経済の荒波の中でも生き残れるようにするため、我々は地域で受け継がれてきた知識や伝統的手法に基づいた新しい戦略を必要としている。

このシンポジウムは、近年のアジア各都市における遺産保全活動、グローバル社会の視点に立った将来的な市民ネットワークの構築、無形文化遺産も含めた現存する遺産群、地域の文化アイデンティティを残していくことなどなどについて、積極的な意見交換を行う。同時に、ソーシャルメディアやウェブを活用した、より柔軟なアジアのネットワークを作りたいと考えている。

主催：(社) 奈良まちづくりセンター

共催 (ペナン)：ペナン・ヘリティジ・トラスト、レスタリ・ヘリティジ・ネットワーク

協力：ジョージタウン世界遺産法人、ペナン州

助成：トヨタ財団「アジア隣人プログラム」、シンク・シティー株式会社

参加団体

日本

(社) 奈良まちづくりセンター

日本イコモス (ICOMOS Japan)

韓国

ソウル北村文化フォーラム (Seoul Bookchon Cultural Forum)

中国

廈門・華僑大学 (Huaqiao University, Xiamen)

【5 ページ】

台湾

台湾歴史資源經理学会 (Taiwan Institute of Historical Resources Management)

カンボジア

クメール建築ツアーズ (Khmer Architecture Tours)

ミャンマー

ヤンゴン・ヘリティジ・トラスト (Yangon Heritage Trust)

タイ

タイ・イコモス (Thai ICOMOS)

チェンマイ都市開発研究財団 (Chiang Mai Urban Development Institute Foundation)

クリエイティブ・アーバン・ソリューション・センター (Creative Urban Solution Center)

プーケット・コミュニティ基金 (Phuket Community Foundation)

インドネシア

インドネシア・ナショナル・ヘリティジ・トラスト (Indonesian National Heritage Trust)

アチェ・ヘリティジ・コミュニティ基金 (Aceh Heritage Community Foundation)

バダン・ワリサン・スマトラ (Badan Warisan Sumatra)

バダン・ペンバーダヤアン・ダン・ワリサン・ニラス (BPWN、Badan Pemberdayaan dan Warisan Nias)

汎スマトラ・ネットワーク (PAN-Sumatra Network)

ジョグジャ・ヘリティジ・ソサイエティ (Jogja Heritage Society)

パグユバン・カク&ニング・スラバヤ (Paguyuban Cak & Ning Surabaya)

【6ページ】

ジョージタウンとマラッカ

マラッカ海峡の歴史的都市群

GEORGE TOWN AND MALACCA

HISTORIC CITIES OF THE STRAITS OF MALACCA

ユネスコ公式文書からの引用

マレーシアのマラッカとジョージタウンは、マラッカ海峡の歴史的植民地都市の代表的存在であり、東洋と西洋を結ぶ貿易港であったかつての姿もたらず一連の歴史的文化的影響を感じさせる。イギリスからヨーロッパ、中東を経てインド亜大陸、マレー諸島、中国へと続く貿易ルートがもたらした、多様な文化遺産があり、マラッカ海峡の歴史都市の中でも最も完全な形で現存している。両都市とも、多様な文化遺産、そして多くの宗教・文化が出会い共存したアジアの伝統を今に伝え、独自の建築や文化、景観をもたらしたマ

レー諸島、インド、中国、そしてヨーロッパ文化の融合を反映している。

登録基準 (2)

マラッカとジョージタウンは、東アジアおよび東南アジアの多文化貿易都市のすばらしい代表例であり、その特徴はマレー、中国、インドの商業的・文化的交流、そして500年にわたって植民地支配を続けた三つの宗主国がそれぞれに建築や都市形成、技術、そして記念碑的芸術作品に残した足跡によってもたらされている。両都市では、長い期間にわたって続いた発展や変遷の異なる段階をうかがい知ることができ、その意味で互いに補完し合っている。

登録基準 (3)

マラッカとジョージタウンは、多様な文化性、アジアの伝統、そしてヨーロッパの植民地であった影響を色濃く残している。有形無形の多様な文化遺産は、異なる信仰の様々な宗教建築、民族、多くの言語、崇拝、宗教行事、舞踊、衣装、芸術や音楽、食べ物、日常生活にも見ることができる。

登録基準 (4)

マラッカとジョージタウンは、独自の建築、文化、景観をもたらした異なる文化的影響の融合を反映しており、同様の例を東アジアおよび東南アジアで他にみつけることはできない。特に、幅広い形態の商家や民家が現存しており、ポルトガル統治時代のものやオランダ統治時代のものが混在するなど、建築の変遷における多様な段階を示している。

【7ページ】

スピーカー (ペナン)

2013年1月12日 (土)

クー・サルマ・ナスシオン (Khou Salma Nasution)

ペナン・ヘリティジ・トラスト会長

クー・サルマ・ナスシオン (旧姓クー・ス・ニン、Khou Sun Nin) は、現在ペナン・ヘリティジ・トラストの会長を務め、孫文が住んでいた邸宅を博物館にした孫文のペナン基地記念館 (Sun Yat Sen Museum)、ペナンを拠点とする出版社アレカ・ブックス (Areca Books) を経営している。彼女はこれまでに、『ペナン・ジョージタウンの路地』(1993年、*Streets of George Town, Penang*)、『商人以上』(2006年、*More Than Merchants*)、『孫文とペナン』(2008年、*Sun Yat Sen in Penang*)、『ペナンの歴史的建造物』(2009年、*Heritage Houses of Penang*) などの著作を出版し、共同著者として『ペナンのポストカード・コレクション』(2003年、*Penang Postcard Collection*)、『ラジャ・ビラとペラ州のマндаイリン族』(2003年、*Raja Bilah and the Mandailing in Perak*)、『キンタ盆地—マレーシアにおける近代開発の先進的事例』(2005年、*Kinta Valley: Pioneering Malaysia's Modern Development*) を手がけている。また、2004年から2005年には、日本財団APIフェローとしてブーケットでの調査を行っている。

リム・ゲックシヤン (Lim Gaik Siang)

ペナン・ヘリティジ・トラスト名誉会計

リム・ゲックシャンは、「フォーチュン500」に名を連ねる米国のエンジニアリング会社にアジア太平洋地域の副社長として勤務する傍ら、文化遺産の保全運動にも積極的に参加している。現在、ペナン・ヘリティジ・トラストの名誉会計、ペナン潮州会館保全委員会の理事および顧問を務めている。保全運動には2000年以降関わっており、ジョージタウンのユネスコ世界遺産リスト登録にも貢献した。2002年には、ペナン潮州会館の名誉保全顧問に任命され、韓江家廟 (Han Jiang Ancestral Temple) の保全プロジェクトを陣頭指揮し、潮州文化の再生のために様々なイベントや活動を企画した。また、2002年から2003年にかけては、ペナン・ストーリー・プロジェクト中国専門部会 (Chinese Colloquium of the Penang Story Project) の座長を務めたほか、2012年にはジョージタウン世界遺産法人 (GTWHI) 委嘱の無形文化遺産目録プロジェクト (Inventory of Intangible Heritage Project) に相談役として関わり、無事終了させた。

グウィン・ジェンキンス博士 (Dr. Gwynn Jenkins)

3Dデザイナーとしての訓練を受けたグウィン・ジェンキンスは、1995年にマレーシアのペナンに移り住み、そこで仕事を始めた。11年にわたりペナンの建築専門家とともに先駆的な保全活動を行い、イギリス・ハル大学 (University of Hull) のサポートを受けて社会文化人類学の博士号を得た後、2007年からは、伝統的な建築素材、記録文書の調査・解析や目録作成を専門とする保全コンサルタントとしての仕事を開始した。彼は、ペナンの歴史的区域の中心部に残された中国式ショップハウスに住み、そこで研究、保全活動、執筆、絵画の制作を行っている。

【8ページ】

ナズィアティ・モド・ヤーコブ (Naziaty Mohd Yaacob)

マラヤ大学環境建築学部 (Department of Architecture, Faculty of Built Environment, University Malaya)

マラヤ大学環境建築学部の上級講師であるナズィアティ・モド・ヤーコブは、2009年に「歴史的建造物および登録公共建築へのアクセス—イングランドとウェールズにおける開発管理のプロセス」(Accessibility to Historic and Listed Public Buildings: Development Control Process in England and Wales) というテーマで博士課程を修了した。彼女は、2011年にシンク・シティー株式会社がスポンサーとなって実施された「ジョージタウンの歴史遺産をめぐるeアクセス・ガイド」(E-Access Guide for Heritage Properties in George Town) において、プロジェクト・コーディネーターを務めた。また、2008年から2012年にかけて、マレーシア障がい者法に関する国家評議会に評議員として2期参加したほか、2009年以降、各地方自治体や女性家族地域開発省が行うアクセスを管理するためのワークショップにおいて、ワークショップ素材の提供やファシリテーターを務め、2011年からは交通省でも同様の仕事を行っている。

タン・ヨウイ (Tan Yeow Wooi)

陳耀威文史建築研究室 (Tan Yeow Wooi Culture Research Studio)

タン・ヨウイは、台湾国立成功大学 (National Cheng Kung University) の建築学科を卒業し、ペナンを拠点として中国人コミュニティに関する歴史的遺産の保全と研究を専門に行う陳耀威文史建築研究室の代表を

務めている。魯班行寺院 (Loo Pun Hong Temple)、韓江家廟、潮州会館の事務所棟、イエン・ケン・ホテルの門楼 (Gate House of Yen Kheng Hotel)、アルメニアン・ストリート (Armenian Street) の福德正神廟 (Hock Teik Cheng Sin Temple) など、ペナンの多くの建築物の保全・保存に関わったほか、シンガポールの蓮山双林寺 (Shuang Lim Monastery) の保存と改修にも参加した。また、チャイナ・ストリート (China Street) 81番地と83番地、チャウリヤ通り (Chulia Lane) の5、7、9、11、170番地、マッカラム・ストリート (Macallum Street) の240番地などで、ショップハウスの保存・活用に取り組んでいる。マレーシア国内外の学会やフォーラムで論文発表を行い、歴史遺産やその保全について多くの文章を書いており、『ペナンの龍山堂邱公司与福德正神廟—その歴史と建築』 (*The history and architecture of Leong San Tong Khoo Kongsí, Penang and Hock Teik Cheng Sin Temple*) などの著作を出版している。ジョージタウン世界遺産法人 (GTWHI) の評議委員も務めている。

ホー・シヨウフン (Ho Sheau Fung)

ペナン・ヘリティジ・トラスト

現在、ペナン・ヘリティジ・トラストのマネジャー。1993年以降、ペナンの芸術や文化活動に、フェスティバルのキュレーター、プロデューサー、ディレクター、女優、脚本家、プログラム・マネジャー、ビデオ撮影者など、様々な立場で積極的に参加している。2001年から2006年にかけては、NGO団体Arts-EDとともに仕事をしており、「歴史遺産の教育プログラムにおける芸術」(Arts in Heritage Education Programme) として、「Anak-anak Kota」というプログラムの運営を担当した。Anak-anak Kotaは、アートを創造的な教育ツールとして活用し、「生きている、変化している」歴史遺産の環境の中で、子どもたちが文化的・歴史的アイデンティティを発見することを目的としている。2008年からは、ペナンにおける伝統的な舞台表現やそれに関わる職業の記録に携わり、いくつものプロジェクトに参加している。

【9ページ】

リム・チェンウェイ (Lim Chung Wei)

ジョージタウン世界遺産法人 (GTWHI)

リム・チェンウェイは、ペナン州にあるマレーシア科学大学 (Universiti Sains Malaysia / University Science of Malaysia, USM) で演劇を専攻し、2000年に舞台芸術の学位を得て卒業した。2001年、NGO団体Arts-EDにてプログラム・コーディネーターを務め、教育の中での演劇活動、子どもの演劇活動、文化遺産に関わるプロジェクトなどに取り組んだ。その後、クアラルンプールに移り、2002年から2005年にかけては、ファイブ・アーツ・センター (Five Arts Centre) にて専属劇団の制作、舞台監督として活動した。「タマン・メダン・アーツ・プロジェクト」(Taman Medan Community Arts Project)、「ADA APA?」、「アジア・ユース・アーツモール」(Asia Youth Artsmall) など、数多くの子どもや地域を対象としたアート・プロジェクトに関わったほか、クランバレー (Klang Valley) の多くの学校で演劇の授業を受け持った。その後、2007年から2011年まで、セントラル・マーケット (Central Market) のアネックス・ギャラリー (Annexe Gallery) にアーツ・マネジャーとして勤務したが、俳優としての活動も継続しており、時折舞台に出演をしていた。2011年4月、ジョージタウン世界遺産法人 (GTWHI) での仕事のためペナンに戻り、現在は地域資源開発担当官 (Community

Resource Development Officer) として、ジョージタウンの現存する遺産に着眼して子どもたちや地域コミュニティとの活動を行っている。

【10ページ】

スピーカー

2013年1月13日（日）

基調講演者

宗田好史

京都府立大学教授、日本イコモス

京都

1956年浜松市生まれ。法政大学工学部建築学科を卒業した後、同大学院を経て、イタリア・ピサ大学、ローマ大学大学院にて都市・地域計画学、歴史的都市保存計画、景観計画を専攻。歴史都市再生政策の研究で工学博士（京都大学）。国際連合地域開発センター（UNCRD）を経て、1993年より京都府立大学准教授、その後教授に就く。国際記念物遺産会議（International Council on Monuments and Sites、ICOMOS）理事、東京文化財研究所客員研究員、国立民族学博物館共同研究員、京都市景観審査会委員、京町家再生研究会理事などを歴任。

主な著書は、『南イタリアの集落—生き続ける石の住まい』（共編、学芸出版社、1989年）、『特集 海外の地方分権事情』（共著、自治体研究社、1995年）、『イタリアの地方自治事情：ローマ市の場合を中心に。』（東京都議会議会局調査部国際課、1998年）、『まちづくりの科学』（共著、鹿島出版会、1999年9月）、『にぎわいを呼ぶイタリアのまちづくり—歴史的景観の再生と商業政策』（学芸出版社、2000年）、『ビジター産業に進路をとれ—日本・都市再生への提言』（共著、日刊工業新聞、2000年）、『都市に自然をとりもどす—市民参加ですすめる環境再生のまちづくり』（共著、学芸出版社、2000年）、『京都観光学のススメ』（共著、人文書院、2005年）、『中心市街地の創造力』（学芸出版社、2007年）、『町家再生の論理—創造的まちづくりへの方途』（学芸出版社、2009年）、『創造都市のための観光振興—小さなビジネスを育てるまちづくり』（学芸出版社、2009年）、『なぜイタリアの村は美しく元気なのか：市民のスロー志向に応えた農村の選択』（学芸出版社、2012年）など。

【11ページ】

イェニー・ラマヤティ（Yenny Rahmayati）

アチェ・ヘリテージ・コミュニティ基金（Aceh Heritage Community Foundation）代表理事
インドネシア アチェ

現在、シンガポール国立大学設計・環境研究院にて建築の博士号取得を目指している。災害がもたらす社会的な影響、特に災害後の住宅再建が彼女の研究テーマである。アチェの建築および文化遺産に関する取り組みを行う団体、アチェ・ヘリテージ・コミュニティ基金を運営しており、アチェの遺産や津波後の再建と復興に関するいくつかの重要なプロジェクトを手がけた。アチェの復興に関わる支援組織との活動により、幅広い国際ネットワークを築いている。アジアおよび西太平洋地域の遺産に関する取り組みを行っているレ

スタリ・ヘリティジ・ネットワークのメンバーである。

モウ・モウ・ルウィン (Moe Moe Lwin)

ヤンゴン・ヘリティジ・トラスト (Yangon Heritage Trust) ディレクター代行

ミャンマー ヤンゴン

ラングーン工科大学 (Rangoon Institute of Technology) で建築を学び (1984年)、バンコクにあるアジア工科大学院 (Asian Institute of Technology) で1991年に都市計画の修士号を取得した。22年にわたり建築家として活躍し、リビング・デザイン・アーキテツ・アンド・プランナーズ社 (Living Design Architects and Planners) を共同で運営している。2009年よりミャンマー建築家協会 (Association of Myanmar Architects) の事務局長を務め、近ごろヤンゴン・ヘリティジ・トラストのディレクター代行に就任した。

ヤム・ソクリー (YAM Sokly)

クメール建築ツアーズ (Khmer Architecture Tours)

カンボジア プノンペン

クメール建築ツアーズは、プノンペンの地元住民や観光客を対象に、歴史遺産の価値に対する認知度向上を目的とした特別ツアー事業で、ヤム・ソクリーは2006年から活動に参加している。2009年にカンボジア王立芸術大学建築学部を卒業し、その後も、カンボジア文化省 (Ministry of Culture and Fine Arts) 遺産センター (Heritage Center) の地域遺産訓練校 (Regional Heritage Training School) で遺産保全について学んだ。同校は、在プノンペン・フランス大使館の支援とパリ・シャイヨー校 (*Ecole de Chaillot*) の関係学部の協力を得て実施されているプログラムである。また、アンコール遺跡公園 (Angkor Archaeological Park) で様々な遺跡保全のチームと仕事をし、経験を積んだ。学校や大学で教鞭をとるほか、プノンペン市内や周辺の重要な史跡へのガイドを行っている。

【12ページ】

アリス・チウ (Alice Chiu)

**台湾歴史資源經理学会 (Taiwan Institute of Historical Resources Management) 事務局長
台湾**

台湾における遺産保全の第一人者であり、1986年に樂山文教基金会 (Yaoshan Cultural Foundation) を設立し、18年間にわたって幹部として活動に携わった。1996年からは台北市長の顧問を務め、都市・文化・教育政策の計画、実践、評価について、中央政府や地方自治体のいくつもの審議会や評議会にも参加している。1992年のアジア・西太平洋都市保存ネットワーク (AWPNUC) 設立、また2002年のIFSAH (International Field School on Asian Heritage) 立ち上げにも貢献した。これまでにいくつもの研究プロジェクトを指揮したほか、遺産に関する法整備や都市計画上の規制、国際シンポジウムやワークショップの実施にも数多く参加した。そして、地域コミュニティの参画を促す社会運動の推進者として、台湾やアジア諸国で地域コミュニティへのエンパワーメント (権限移譲) に深く関わっている。

イ・ジュヨン (LEE Joo-yeon)

北村文化フォーラム (Bookchon Cultural Forum) 事務局長 / DOCOMOMO-Korea (International Working Party for Documentation and Conservation of buildings, sites and neighborhoods of the Modern Movement Korea) 副会長

韓国 ソウル

北村文化フォーラムは、ソウル・北村(プッチョン)の歴史的区域に残る伝統的木造建築「韓屋」(ハノク)の保存活動において、重要な役割を果たしている。イ・ジュヨンは、同フォーラムの事務局長として活躍するほか、DOCOMOMO-Koreaの副会長を務めている。また、建築評論家として建築誌『Space』の編集長を務めた。人間性や社会が共有する価値を現すものとしての建築、また建築の社会性や歴史的建造物の持続可能性、そして建築と地域の歴史との間にある相乗作用に関心を寄せている。

イ・キュンタク (LEE Kyung-taek)

北村文化フォーラム アシスタント・アドミニストレーター

韓国 ソウル

弘益大学校 (Hongik University) で建築とデザインを学び、2010年に北村文化フォーラムに参加。2009年からは、韓国の空間研究所 (Space Group) および建築誌『Space』に携わっている。建築とそれを囲む都市、社会学、メディアに分野横断的関心を持っている。

【13ページ】

ヨングタニット・ピモンサティアン (Yongtanit Pimonsathean)

タイ・イコモス (ICOMOS Thailand) 会長

タイ

東京大学で都市工学の博士号を取得し、タイのタンマサート大学 (Thammasat University) 建築計画学科にて都市計画と遺産保全について教鞭を執る。現在、タイ・イコモスの会長のほか、タイ王室財産局 (Crown Property Bureau) の保全顧問を務めている。バンコクの歴史的区域やプーケットなどで、タイの都市遺産を住民主体で再生・保全させるプロジェクトに積極的に関わっている。

これまでに出版された論文、著作は「バンコクにおけるコミュニティ・サービスとしての保全教育」『構築環境』第33巻第3号(2007年、“Conservation Education as a Form of Community Service in Bangkok, Thailand” in *Built Environment* 33, 3)、 「都市文化遺産の保全における活用の現状」『都市遺産の保全：マカオ・ビジョン』(2002年、“Current Issues Concerning Adaptive Re-use in the Conservation of Urban Cultural Heritage” in *The Conservation of Urban Heritage: Macao Vision*)、 『北チャロン・クルン通りの遺産建造物』(2009年、*Heritage Buildings on Northern Charoen Krung Road*)、 「プーケット・オールドタウンの地域密着保全活動」タイ・イコモス主催アジア都市遺産に関する国際会議(2011年、“The Locally-based Conservation of Phuket Old Town” in ICOMOS Thailand International Conference on Asian Urban Heritage) など。

龍元 (YUAN Long)

建築家／廈門・華僑大学教授 (Huaqiao University, Xiamen)

中華人民共和国

名古屋大学で建築を学び、現在は中国の華僑大学（廈門）と華中科技大学（武漢、Huazhong University of Science & Technology）で教授職についている。公共参画、コミュニティ形成、都市の非公式性、民俗建築などの研究分野に関心を持っている。著書『都市の非公式性』（2010年、*Urban Informality*）のほか、中国の建築と都市空間について様々な論文を書いている。

室雅博

(社) 奈良まちづくりセンター理事長

日本

龍谷大学で経済学の修士号を取得。専門は、地方自治体とコミュニティ計画。自治体の職員を経て、NGO勤務。2002年からは、奈良の景観保全に取り組む（社）奈良まちづくりセンターの理事長を務めている。伝統的な町屋についての論文「町屋再生と景観保全－「奈良町」の事例から」を発表している。

【14ページ】

米村博昭

(社) 奈良まちづくりセンター理事

日本

1953年、奈良県橿原市今井町に生まれる。橿原市総合政策部に勤務する傍ら、（社）奈良まちづくりセンターの理事を務める。NPO法人今井まちなみ再生ネットワークのメンバーである今井町並み保存会の理事、奈良県建築士会副会長。1984年から2000年までは、橿原市役所で今井町の町並み保存に取り組んだ。

岩井一郎

(社) 奈良まちづくりセンター理事

日本

地方自治体にて都市計画を担当。これまでに、住民参画のための地域プラン作成、都市デザイン、1985年に起こった阪神淡路大震災からの復興プロジェクトなどに取り組んできた。現在は、住宅政策課の課長として勤務。（社）奈良まちづくりセンターの理事の一人であり、21年間にわたって同センターの国際交流事業を担当してきた。これまでに50カ国地域以上を訪れ、発展途上国の多くの歴史的地区で実地調査を行ってきた。神戸大学にて環境計画を専攻し、工学修士号を持つ。1990年には、一級建築士の資格を取得している。発展途上国に残る歴史的地区やそこでの民族の共存、遺産保全の方法論などについて数多くの論文を書いている。

チョウ・カリヤー (Chaw Kalyar)

ヤンゴン・ヘリテージ・トラスト (Yangon Heritage Trust) 理事・事務局員

ミャンマー ヤンゴン

ヤンゴン・ヘリティジ・トラストの理事、事務局員を務める。ヤンゴンにて建築を学び（2001年）、2004年にはカーディフ大学（イギリス、Cardiff University）で環境建築を専攻する。ミャンマーの歴史的建造物の保全に積極的に取り組み、ヤンゴン・ヘリティジ・トラストの発足以来連携を図ってきた。現在は、ヤンゴン・ヘリティジ・トラストの活動に無償参加しており、ヤンゴン・ヘリティジ・トラストが主催した初の会議「21世紀のヤンゴン保全戦略に向けて」（2012年6月、Towards a Conservation Strategy for Yangon in the 21st Century）にて論文「ヤンゴン遺産区域の再開発計画」（A Redevelopment Plan of a Heritage Zone in Yangon）を発表した。

【15ページ】

カトリニ・プラティハリ・クボントゥブ（Catrini Pratihari Kubontubuh）

インドネシア・ヘリティジ・トラスト（Indonesian Heritage Trust） エクゼクティブ・ディレクター

インドネシア ジャカルタ

インドネシア・バンドン工科大学（Institute Technology of Bandung）で都市・地域計画を専攻し、1995年に卒業。1997年には、ベルギーのルーヴァン・カトリック大学（Universiteit of Katholieke Leuven）で修士号（人間居住空間における建築）を取得した。西スマトラ・ヘリティジ・トラスト（1999年、West Sumatera Heritage Trust）、バリ・クナ・ヘリティジ会（2000年、Bali Kuna Heritage Society）、バリ・ヘリティジ・トラスト（2000年、Bali Heritage Trust）、インドネシア遺産保全ネットワーク（2000年、Indonesian Network for Heritage Conservation）、インドネシア・ヘリティジ・トラスト（2004年、Indonesian Heritage Trust）など、インドネシアにおける遺産保全組織の発足に設立メンバーとして関わった。2007年、インドネシア・ヘリティジ・トラスト（*Badan Pelestarian Pusaka Indonesia*—BPPI）のエクゼクティブ・ディレクターに就任し、同年に約40か国が参加して発足したINTO（International National Trusts Organization）の理事を務めている。ボランティアとして取り組んでいる遺産保全の活動に加え、文化・教育の分野で活動する財団Yayasan Arsari Djojohadikusumo（YAD）のエクゼクティブ・ディレクターを務めている。また、大学で教鞭を執っているほか、2007年から2012年にかけては世界銀行ジャカルタ事務所に勤務し、コミュニティ参画の活動や文化関連プロジェクトに取り組んだ。

プラニー・サクルピパタナ（Pranee Sakulpipatana）

プーケット・コミュニティ基金（Phuket Community Foundation）、タイ・プラナカン協会（Thai Peranakan Association） 副会長

タイ プーケット

プーケット・コミュニティ基金の創立メンバーであり、タイ・プラナカン協会の副会長。プーケット・ラチャパット大学（Phuket Rajabhat University）の英文学部で36年間にわたって教職を務め、プーケットの歴史、遺産、文化に関する大学博物館を設立した。彼女の家族は、プーケット旧市街の「ハイストリート」であるタラン通り（Thalang Road）で、民族衣装のバティック・サロン（sarong batik）を扱う商店を営んでいる。彼女自身は、ペナンと多くの結びつきを持つババ・ニョニャ（Baba Nyonya）、またはプラナカン

(Peranakan) の家系の出身である。バイリンガル月刊誌「Phuket Bulletin」に寄稿しているほか、プーケットのメディアに定期的に登場し、最近では月刊誌「Phuket Tatler」の表紙を飾った。

ヌタコルン・ヴィティタノン (Nuttakorn Vititanon)

クリエイティブ・アーバン・ソリューション・センター (Creative Urban Solution Center)

委員

タイ チェンマイ

環境、都市開発、保全に関する取り組みを行っているチェンマイのクリエイティブ・アーバン・ソリューション・センターで、委員を務めている。チェンマイ・メーファールアン大学法学部の講師兼副学部長、クリエイティブ・アーバン・ソリューション・センター副センター長。チュラーロンコーン大学で政治学の修士号、メーファールアン大学で社会科学の博士号を取っている。専門は、国法学、地方分権、タイの地方政治。

【16ページ】

マニサワード・ジンタピタック (Manissaward Jintapitak)

クリエイティブ・アーバン・ソリューション・センター

タイ チェンマイ

バンコク大学でインテリア・デザインを専攻し、チェンマイ大学で建築と教育工学の二つの修士号を取得。現在、ナレッジマネジメントの博士号取得を目指している。伝統的なラーナー (Lanna) 寺院壁画の保存に積極的に取り組んでおり、僧侶や職人と連携を図りながら、ソーシャルメディアを活用して支援と参加を広く呼び掛けている。

【17ページ】

基調講演 (妙録)

「世界文化遺産の保全四分野における新しい潮流ーアジアの文化的ダイナミズムを考える」

*New Trends in four fields of the conservation of the World Cultural Heritage -
Considering Asian
Cultural Dynamism*

宗田好史

京都府立大学教授／日本イコモス

世界遺産条約が採択・発効されてから40年間、遺産をめぐる考え方の焦点は、個々の遺跡から無形の価値を伴う歴史的な景観、そして生活文化の中の遺産へと意味ある広がりを見せ、それによって保全の方法もまた大きく変化した。形ある遺跡の保存だけでなく、遺産と関わりを持つ地域コミュニティに住む住民の生活とその質が重視されるようになった。

2012年11月6日から8日にかけて京都で開催された世界遺産条約採択40周年記念最終会合 (京都会合) のテーマは、「世界遺産と持続可能な開発：地域社会の役割」であった。かつて、遺産保全の最終的な目標は有形の遺跡を守ることであった。今、遺産を所有、活用し、その遺産とともに、あるいはその中で生活する人々やコミュニティにより大きな関心が寄せられている。コミュニティが率先して保全活動に取り組むことが、

本当の意味でのコミュニティ参画となる。遺産保全と持続可能な開発の不可欠な要素は、人、そして地域コミュニティである。そこには、遺産を楽しむ人々、遺産の中や周辺に居住する人々、それを所有する人々、管理する人たち、いくつものステークホルダーが存在する。遺産を守っていく上で、それらの人々はいくつもの困難に直面する。これら異なるステークホルダー間で共通理解をはぐくみ、問題を解決していくプロセスは、保全プロジェクトの成果そのものと同じくらい重要であるといえよう。

このようにして、ここ数十年で世界の文化遺産の保全と管理のあり方は大きな変化を迎えた。1970年代まで遺産保全は主に学術領域のことであったが、70年代に西ヨーロッパや米国、80年代にアジア諸国で高まりを見せた市民運動によって、その状況が変わり始めた。遺跡や歴史的な町並みをより適切に管理する必要性がユネスコやイコモスといった国際機関によって認知され、1964年のヴェネツィア憲章や1972年の世界遺産条約へとつながっていく。このような考え方は、アジアでも1990年代にアジア・西太平洋都市保存ネットワーク（AWPNUC）の活動を通して広められた。

今回のレクチャーでは、以上のような変遷とともに、文化遺産マネジメントにおいてヨーロッパ、日本、アジア諸国で共通する傾向、そして、国ごとによって異なる法整備や言語の違いなど、国際的な協力関係の足かせとなるような課題についても議論する。これらの議論を通して、遺産資源の管理活用の理論と実践においてどのような変化があったか整理していく。具体的には、最近のユネスコの会議や関連するイコモスの専門家会議でも示されたように、次の四つに分類される。遺産をめぐる包摂に重点を置く考え方が取り入れられるようになったこと、社会における遺産の役割、その重要性、そして基準の強化といった管理実務における変化である。

【18ページ】

「より力強い遺産保全運動への20年間」

Two decades toward a stronger heritage movement

カトリニ・プラティハリ・クボントゥブ

Catrini Pratihari Kubontubuh

インドネシア・ヘリテージ・トラスト（インドネシア ジャカルタ）

Indonesian Heritage Trust, Jakarta, Indonesia

アジアの国々では1990年代に遺産保全運動が始まり、同時期にインドネシアでも、バンドンやジャカルタの組織を筆頭にいくつかの遺産保全団体が設立された。

インドネシアには、守っていくべき有形無形の多様な自然・文化遺産がある。しかし、保全の重要性への認識不足により、多くの遺産が放置されたまま、あるいは十分に管理されていない。消滅の危機に瀕していたり、損傷を受けたり、消えてしまったものも少なくない。20年ほど前から、保全の問題が広く知られるようになってきたが、問題や課題は依然多い。保全の試みは多くの地方で行われてきたが、単体の遺跡から遺産区域全体を対象としたものまで、そのレベルと集中の度合いは様々である。中には、今でも極めて低い認識しか持っていない地方もある。

異なる都市で保全活動に携わる関係者同士のコミュニケーションを図るため、2008年、インドネシア・ヘリテージ・トラスト（*Badan Pelestarian Pusaka Indonesia*—BPPI）の支援によってインドネシア遺産都市

ネットワーク (Network of Heritage Cities in Indonesia / *Jaringan Kota Pusaka Indonesia - JKPI*) が立ち上げられた。JKPIの参加者は、遺産を持つインドネシア各都市の市長であり、インドネシア文化・観光省によって正式に発足された。BPPIにとって、遺産を持つ都市が関わるこの意味は大きく、その後も遺産都市の計画と管理に関するプログラム (Heritage Cities Planning and Management / *Program Penataan dan Pengelolaan Kota Pusaka - P3KP*) を公共事業省と国家空間計画局の協力を得て実施した。

この論文では、過去20年間にわたるインドネシアでの遺産保全運動をその始まりから検証するとともに、より強いネットワークを、インドネシアだけでなくアジア全域で将来形成するために、互いに協働、協力できる可能性を見つけていきたい。

【19ページ】

プーケット旧市街に残るショップハウスの変わりゆく表情

The Changing Faces of the Shophouses in Phuket Old Town

プラニー・サクルピパタナ

Pranee Sakulpipatana

タイ・プラナカン協会 (タイ プーケット)

Thai Peranakan Association, Phuket, Thailand

プラニー・サクルピパタナは、プーケット旧市街で「百万長者通り」と呼ばれ、歴史区域の中心であるディブック・ロード (Deebuk Road) の歴史的特徴について語る。この地区で最も有力な四つの家族は、いずれもタン (Tan) 一族の家系である。最初の歴史的人物は、中国から移民としてやってきて錫鉱山で成功し、豪邸を建設したタン・クアド (Tan Kuad)。今回のトークでは、状態よく残されているタン・イン・キー (Tan Eng Kee) のショップハウスや、錫鉱山を手がけていたタン・ジライ (Tan Jilai) がかつて家族で住んでいた家、そしてソフォン・イークワニッチ (Sophon Eakwanich) のすばらしいショップハウスについても紹介する。プーケット・メルリン・ホテルを創業したジア (Jia) 一族も、かつてはこの通りに居を構えていた。一方、コイ (Koy) 一族は、今でも大きな倉庫付のショップハウスを3軒持っている。これらの家系の子孫の多くは、観光のような近代的なビジネスで成功を取めるようになったが、先祖の家が「百万長者通り」に今もあることに誇りを持っている。ただ、彼らの命運は時代とともに変化しており、朽ちはたてた家や再開発の対象となった建物もある。

バンダ・アチェと遺産保全運動—津波から8年が経過して

Banda Aceh and Heritage Movements: 8 years after the Tsunami

イエニー・ラマヤティ

Yenny Rahmayati

アチェ・ヘリテージ・コミュニティ基金 (インドネシア)

Aceh Heritage Community Foundation, Indonesia

2004年12月26日にマグニチュード8.9の地震、そして津波がアチェ地方を襲ってから8年が経つ。この大災害は、都市の居住空間、財産、インフラ、そして自然環境を破壊したことによって、都市空間に大きな変化

をもたらした。アチェの文化遺産もまた大きな影響を受けた。

それ以降、住宅やインフラの復旧と比較して、アチェの文化遺産には、有形無形とも、あまり関心が集まっていない。しかし、アチェの将来の発展と長期的な復興を考えた時に、文化遺産が重要な資源であることは間違いない。この発表では、アチェの文化遺産の状況について、特に、津波によってもっとも甚大な被害を受けた地域でもあるアチェ州の州都バンダ・アチェの有形遺産とその区域について検証する。

発表では、津波の前から、災害時、津波後、現在の状態に至るまでの復興と復旧、そしてそれが完了した後の期間までを網羅する。また、アチェ・ヘリテージ・コミュニティ基金およびそのほかの組織による保全運動と関連する活動についても考察する。これらの検証を通じて、アチェの文化遺産が持つ潜在的な可能性とともに、直面する課題や障壁を明らかにし、同様の状況にある他のアジアの都市と共有できればと考える。アイデアや意見、情報の交換が、最適な戦略と解決を引き出すだけでなく、アジアの都市間のネットワークを強化し将来の保全活動を助けることになるはずだ。

【20 ページ】

プノンペンの開発と遺産保全の課題

Phnom Penh Development and Heritage Conservation Challenge

ヤム・ソクリー

YAM Sokly

クメール建築ツアーズ（カンボジア プノンペン）

Khmer Architecture Tours, Phnom Penh, Cambodia

カンボジア王国の首都プノンペンは、様々な文化や民族、クメール人、中国人、チャム族、ベトナム人、マレー人、そしてインド人が融合している場所である。このような文化・社会的な特徴、そして都市計画を通じたフランスの影響が、プノンペンおよびカンボジア全域に多様な文化遺産と都市の景観をもたらした。

1960年代後半から1990年代前半まで40年間続いた内戦を生き延びた建物は、1997年から2009年にかけて行われた急速な開発によって、土地投機と不動産開発の波にさらされている。この近代化のプロセスにより、プノンペンのランドマークともいえる重要な歴史的建造物が消滅してしまった。このような不幸な出来事に加え、プノンペン市による将来の計画では明確な保護区域の設定や遺産保全の提案がなされていない。

現在、ヘリテージ・センター (Heritage Center)、文化省 (Ministry of Culture and Fine Arts)、クメール建築ツアーズ、マノリス・ハウス (Manolis House)、バタンバン・マスター・プラン・チーム (Battambang Master Plan Team)、バタンバン市、アプサラ (Apsara)、シエムリアップ (Siem Reap) 市、カンポット・マスター・プランニング・チーム (Kampot Master Planning Team) など、出版活動や一般向けのレクチャー、展示、記録採取、現地調査、各地域コミュニティでのミーティングを通じて、認知度を高めようと活動している公共機関や民間団体が存在する。

このレクチャーは、カンボジアの都市の発展の変遷を、地理的、文化的、そして社会的な側面から見ていくとともに、いくつかの歴史遺産に焦点を当て、現在の都市開発と遺産保全が直面する課題も明らかにする。

変わりゆく台北の歴史的地区—大稻埕の事例から

Transforming Heritage District in Taipei - The Case Study of Dadaocheng

アリス・チウ

Alice Chiu

台湾歴史資源經理学会（台湾）

Institute of Historical Resources Management, Taiwan

何十年間にもわたり、豊かな文化遺産と人々の記憶を有するアジア各都市の歴史的領域は、急速な経済発展を経験し、土地開発や人口増加、近代化に脅かされてきた。そのような事例の一つが大稲埕の歴史的領域であり、近代台北の最初の商業領域として、その歴史は1851年までさかのぼる。

市街地が拡大するにつれ大稲埕地区の重要性は低くなったが、樂山文教基金会（Yaoshan Cultural Foundation）を中心とする認知向上を目指した市民運動が1987年に起こり、同地区は大規模な保全・保存活動に取り組むこととなった。

【21 ページ】

2000年、台北市都市發展局（Taipei City Government, Dept. of Urban Development）は、市内に特別の区域を設ける法的措置を実施し、促進民間參與公共建設法（Transferable Development Rights - TDR）を導入した。これにより、200を超える建物が改修、保存、復元、あるいは建てなおされた。それ以降、台湾の保全活動では「市民参画」の考え方が取り入れられるようになり、その成果の一つが都市再生前進基地（Urban Regeneration Station - URS）である。台湾歴史資源經理学会は、大稲埕の中心部にあるURSの運営を委託されている。

歴史的領域の建物が公共的再利用のために寄贈されることは、保全活動の文化・経済的価値、市民のアイデンティティ構築のための都市再生のメカニズムを問い直すとともに、国内外からの訪問客にとってランドマーク的魅力的創出につながっている。その建物の個性と商業活動を失うことなく保存させることで、大稲埕はさびれた古い街から独自の商業活動を行う新しい魅力を持った場所へと変わった。都市保全が多くの対立を生み出すことなく行われていることで、地域の住宅環境の整備、地域にあった再活用、持続可能な開発、そして台北独自のアイデンティティの創出が進んでいる。

北村の都市開発の歴史と現状

The urban development history of Bukchon Culture Forum and its current situation

イ・ジュヨン、イ・キュンタク、

Joo-yeon Lee and Kyung-taek Lee

北村文化フォーラム（韓国 ソウル）

Bukchon Culture Forum Seoul, Korea

韓国の首都ソウルは、典型的な計画都市であり、14世紀後半から始まった封建王朝である李氏朝鮮とともにその都市形成が行われ、その後発展してきた。街の成り立ちには、背山臨水の原則に従ったトポグラフィーが見られる。

北村は有力な家々が勢力を誇った地域であり、地形図からは、19世紀後半、開港の時代、そして近代化が進む1920年代までいくつもの大きな区画があったことが読み取れ、ソウルの中心であったことがわかる。

住民の意識の高まりとソウル市の努力により、2000年から地域の活性化を目指す北村プロジェクトが始まった。伝統的建築である韓屋を残すために、韓屋に住む市民にはソウル市から改修費の提供、もしくは無利子の貸し付けが行われている。

【22ページ】

ヤンゴンの遺産保全：取り組みと課題

Yangon Urban Heritage Conservation: Efforts and Challenges

モウ・モウ・ルウィン、チョウ・カリヤー

Moe Moe Lwin and Chaw Kalyar

ヤンゴン・ヘリテージ・トラスト（ミャンマー）

Yangon Heritage Trust, Myanmar

1990年代、ヤンゴンの都市計画者や建築家は、ヤンゴン市街地の、中でもシュエダゴン・パゴダ（Shwedagon pagoda）とヤンゴンの景観に占めるその位置について、大規模な保全戦略の必要性を感じていた。現在、38階建ての高層ビルの計画や中心部に建てられる最新コンドミニアムの広告など、ヤンゴンが経験している激しい変化を前にして、その必要性は一層増している。異なる分野の人々、学者からあらゆる関係者、国内外で保全に取り組む人たちのネットワーク、市民社会、そして政府を巻き込む、包括的で連携関係に基づく取り組みが求められている。ヤンゴンとは、我々にとって何を意味するのか？どこから始めるのか？現在の課題、そしてこれから直面する課題は何か？

クリエイティブ・アーバン・ソリューション・センター：チェンマイ学習センター

Creative Urban Solutions Center: Chiangmai Learning Center

マニサワード・ジンタピタック、ヌタコルン・ヴィティタノン

Mrs. Manissaward Jintapitak and Mr. Nuttakorn Vititanon

タイ チェンマイ

Chiangmai, Thailand

クリエイティブ・アーバン・ソリューション・センター（CUSC）は、チェンマイについて、ランナー文化、維持可能な都市管理、仏教、廃棄物の付加価値を付けた処分、気候変動、その他多くの事について学ぶ場所である。また、チェンマイにとっての資源を提供する場所として、子どもや若者の地域コミュニティへの理解を深めるためのトレーニング、他の都市への訪問を通してその場所のアイデンティティについて学ぶ活動、日本の奈良まちづくりセンターやマレーシアのペナン・ヘリテージ・トラストといった国内外の団体との連携、地域の現状に関する雑誌や書籍の発行、北タイやチェンマイの文化・環境に関する常設展示などを通して、知識や情報の普及、発信を行っている。

同センターは、チェンマイの都市開発基金（Urban Development Institute Foundation）の一部であり、当初は、2001年にチェンマイ都市研究センター（Chiangmai Urban Studies Center）という教育機関として設立された。都市開発基金は、チェンマイが方向性なく成長することに懸念を感じた住民グループによって1990年に立ち上げられた非営利組織である。

チェンマイが今の世代にとっても、また将来の世代にとってもよい町であるために、政策と個人の両方のレベルで変化が生まれるよう、これまでの変遷を研究し、データと新しいアイデアを示し、新たな解決策を提案し、それに基づくキャンペーンを行っている。

【23ページ】

矯正施設を公共の場所に変えることや道路拡張の中止、高層ビル建設への反対運動など、センターが提案したキャンペーンの多くは人々に受け入れられてきた。特に大きな成果を上げたのは、1930年代のコロニアル様式が混在した「Hueantonchoke House」の保存で、2010年に「クリエイティブ・アーバン・ソリューション・センター：チェンマイ学習センター」として活用されることになった。この発表は、Hueantonchoke Houseの保存について、特に保存の過程について、深く考察する。

タイ・イコモスと保全活動

ICOMOS Thailand and the conservation activities

ヨングタニット・ピモンサティアン

Yongtanit Pimonsathean

タイ・イコモス

ICOMOS Thailand

イコモス (International Council on Monuments and Sites - ICOMOS) は、世界的な連携と専門家によるアドバイスをもとに、国際レベルでの文化遺産の保全を行うことを目的としてパリで設立された。タイ・イコモスは、ヴェネツィア憲章の採択とイコモスの設立から20年後、1985年に結成された。1985年から2009年まではタイ政府によって運営され、政府高官が幹部職に就き、国内委員会を形成していた。当初は、保全に関する学術的な自由、専門家や研究者とのつながりという面において制約があり、遺産の認定や保全の作業が進捗しなかった。1987年、イコモス国際科学委員会による民俗建築に関する会議を主催し、ようやく国際レベルでの貢献を開始した。2003年に、シャム建築協会 (Association of Siamese Architects)、各大学、そしてタイ王室財産局 (Crown Property Bureau) といった同じ志を持つ他の組織とネットワークを構築し、公的な役割が増大した。2004年には、初の年次学術会議を開催する。2009年、タイ・イコモスは独立した非政府組織として正式に登録された。現在は、遺産保全の振興を目的に、会議やセミナーの開催、国内外での遺産の現地調査、出版、政府に認定されていない遺産の保護を求める活動などを行っている。タイのNGOとして、保全活動のための資金不足、遺産管理や認定における不明確な政策、専門家同士のより有効な協力関係の構築など、いくつかの課題に直面している。拡大しつつあるネットワークを使い、他の組織との連携を密に図っている。

中国における地域開発と文化を中心とした都市再生の現状

The current status of community development and culturally-led urban regeneration in China

龍元

Long Yuan

廈門・華僑大学（中華人民共和国）

Huaqiao University, Xiamen, P.R. China.

現在の中国の超急速な都市化と市民社会の構築およびコミュニティ参画の間には、特に地域の遺産保全・都市再生の分野において、大きな溝が存在する。1990年に制定された法律で謳われているように、地域コミュニティは住民による独立した組織であるはずだが、実際には多様な行政サービスを請け負い、政府の最下級の機関として働いている。

【24 ページ】

最近では、文化エリート、政府、コミュニティの三者がパートナーシップを結び、文化を核にコミュニティが成長するという先駆的な喜ばしい事例がいくつか見られるようになった。上海と廈門の二つの事例を取り上げ、そのプロセスと関係する登場人物たちの役割に焦点を当てることで、コミュニティ主導の可能性と課題を浮き彫りにする。ここでの中心的な結論は、このような異なる立場の三者パートナーシップは、現代中国の都市にとって最も実際的かつ合理的な手法である、ということだ。一方で、コミュニティをどのように促し、芸術を介した「中からの変化」を起こすのか、また芸術と文化産業をどのようにコミュニティの日常生活と維持可能な方法で融合させるのか、といった未解決の問題も残っている。

歴史的エリア奈良町ー現状とNMCによる最新プロジェクトについて

The historical city: Nara-machi - its current situation and NMC's latest project

室雅博

Masahiro Muro

（社）奈良まちづくりセンター（日本）

Nara Machizukuri Center, Japan

奈良・平城京は中国の長安をもとに設計されたといわれる。奈良町は、かつて平城京があった位置にあり、1300年以上前の古都の雰囲気は今も残す。

1960年代には、奈良町を貫く政府の道路建設計画がもちあがり、奈良町は消滅の危機を迎える。仮にこの政府案が実施されていけば、伝統的な「町屋」や商家が残る路地は消えていたことになる。

奈良まちづくりセンター（NMC）は、奈良町の「町屋」が残る路地の保存を目指して設立された。NMCは実地調査を行った後に、道路計画への対案を行政に示し、政府はこれを受け入れて、景観と路地の保存を始めることになった。

しかし、それにもかかわらず、これまでに多くの「町屋」が取り壊され、これからも壊されるであろう。NMCでは、空いている町屋の活用を促し、都市景観条例の認知普及をすすめている。また、伝統的な「町屋」について、家の構造、居住者の生活などについて調査を行う予定であり、行政への提案書にまとめる。

NMCでは、アジアの国々の伝統的な町の最新状況を学びながら、引き続きまちづくりをすすめていきたいと考える。

今井町重要伝統的建造物群保存地区の空き家活用に関する事例

The cases of practical use of the vacant houses at the Imai Important Preservation District for

Groups of Historic Buildings.

米村博昭

Hiroaki Yonemura

(社) 奈良まちづくりセンター (日本)

Nara Machizukuri Center, Japan

今井町は、15世紀に浄土真宗称念寺を中心に形成された。このように、寺の境内に作られ、濠や土塁に囲まれた集落を寺内町という。今井町は、1993年に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。

現在、今西家住宅を含む9軒の伝統的民家が国の重要文化財に指定されており、3軒が奈良県指定有形文化財、6軒が橿原市指定文化財となっている。しかし、空き家の増加が大きな問題となっており、NPO法人今井まちなみ再生ネットワークでは問題解決に取り組んでいる。

【25ページ】

この発表では、公共施設、展示場、レストラン、コミュニティスペース、アート・フェスティバルなどの活用事例と活用を支援するシステムを紹介する。

アジアの町並み保存ネットワークと奈良まちづくりセンター

Asian Network for Urban Conservation and Nara Machizukuri Center

岩井一郎

Ichiro Iwai

(社) 奈良まちづくりセンター (日本)

Nara Machizukuri Center, Japan

奈良まちづくりセンター (NMC) は、日本で最も古い町の一つである奈良の歴史的区域の保存を目的に、1979年に設立された。1990年代からは、他のNGOとのネットワークを、奈良県内からアジアに広げている。

NMCは、1991年にマレーシアのペナン・ヘリテージ・トラストとの交流プログラムを開始し、以降タイ・チェンマイ、韓国・ソウル、インドネシア・アチェなどアジア各地のNGOとの交流を行っている。

NMCは、アジアの町並み保存ネットワークの一員としても活動している。1991年には、他のNGOとともに、アジア・西太平洋都市保存ネットワーク (AWPNUC) を設立した。さらに、2004年にレスタリ・ヘリテージ・ネットワークが立ち上がり、その後多くの歴史都市でヘリテージ・トラストが結成された。この間、1998年に奈良が、2008年にペナンが世界遺産に登録された。

しかし、アジアの多くの地域では、歴史的町並みが依然厳しい状況に置かれている。経済の巨大な力が多くの歴史都市や伝統的なコミュニティを破壊してきた。1960年代から80年代にかけて、まず日本の古い町並みが失われ、続いて今は中国の町を急速に破壊している。グローバル経済の次なる標的は、成長が期待されるミャンマー、カンボジア、そしてインドネシアであろう。ユネスコの世界遺産登録地であっても、過剰な

観光化によって、古くからのコミュニティや無形の生活遺産が失われている。中には、そこに住む人のためではなく、観光客のための場所となってしまった遺産もある。

我々は今、ネットワークを強化し、NGOや地域コミュニティによるアジア型の保全活動について、強いメッセージを世界に向けて発信しなくてはならない。決して大きな組織ではないが、NMCはアジアのネットワークの一員として、グローバル社会における保全活動において重要な役割を担っていきたいと考える。

【26ページ】

第1日

日付：2013年1月12日（土）

時間：午前8時（ラブ通り（Love Lane）23番地に集合）から午後5時

場所：ペナン潮州会館ホール、ペナン・チャウリヤ通り（Chulia Lane）127番地

午前8時 ペナン・ラブ通り23番地に集合

午前8時15分 ジョージタウンの歴史遺産ウォーク

アルメニアン・ストリート（Armenian Street）120番地にある孫文のペナン基地記念館（Sun Yat Sen Museum）を訪問

アチェ通り（Lebuh Acheh）にあるジョージタウン世界遺産法人の事務所を訪問

午前10時10分 ペナン潮州会館にて休憩

午前10時30分 ペナン潮州会館への歓迎／リム・ゲックシヤン（Lim Gaik Siang）（ビデオ映像）

午前10時45分 ジョージタウン世界遺産の紹介

／リム・チューイピン（Ms. Lim Chooi Ping、ジョージタウン世界遺産法人）

午前11時15分 質疑応答

午前11時25分

「ペナン・ストーリーー歴史的な物語の提示による地域の文化多様性の描写」

The Penang Story -Community mapping of cultural diversity through the presentation of historical narratives

クー・サルマ・ナスシオン（ペナン・ヘリティジ・トラスト）

Khoo Salma Nasution, Penang Heritage Trust

午前11時45分

「ペナンのヴィジョンー遺産研究のための知識バンクを作る」

Visions of Penang - creating a knowledge bank for heritage research

グウィン・ジェンキンス博士

Dr. Gwynn Jenkins

午後12時05分

「ジョージタウンの無形文化遺産目録作り」

Inventory of Intangible Cultural Heritage, George Town

リム・ゲックシヤン（ペナン・ヘリティジ・トラスト）

Lim Gaik Siang, Penang Heritage Trust

午後12時25分 質疑応答

【27ページ】

午後12時45分 記念撮影

午後1時 昼食

午後2時 連絡

午後2時10分

「現存する歴史遺産とペナン職人徒弟プログラム」

**Living Heritage Treasures and Penang Artisans Apprenticeship Programme
(PAPA)**

ホー・ショウフン（ペナン・ヘリティジ・トラスト）

Ho Sheau Fung, Penang Heritage Trust

午後2時30分

「ジョージタウン世界遺産を讃える」

George Town World Heritage Celebrations

リム・チャンウェイ、ホー・ショウフン

Lim Chung Wei and Ho Sheau Fung

午後2時50分 質疑応答

午後3時10分 お茶休憩

午後3時30分

「ペナン・ジョージタウンでのショップハウスの保存と活用」

Shophouse conservation and adaptive use in George Town, Penang

タン・ヨウイ（陳耀威文史建築研究室）

Tan Yeow Wooi, Tan Yeow Wooi Culture Research Studio

午後3時50分

「歴史遺産と歴史財産へのユニバーサル・アクセス」

Universal Access to Heritage Sites and Properties

ナズィアティ・モド・ヤーコブ（マラヤ大学環境建築学部）

Naziaty Mohd Yaacob, Department of Architecture, Faculty of Built Environment, University
Malaya

午後4時10分 質疑応答

午後4時30分 まとめと連絡

午後5時 終了

【28ページ】

第2日

日付：2013年1月13日（日）

時間：午前9時から午後5時

場所：イースタン&オリエンタル ホテル（E&O Hotel）

午前9時 参加者受付

午前9時30分 ペナン・ヘリティジ・トラスト会長クー・サルマ・ナスシオンからの歓迎

午前9時40分

モデレーター：A. ガファー・アーマド教授（マレーシア科学大学）

Professor Dr. A. Ghafar Ahmad, Universiti Sains Malaysia/University Science of Malaysia, USM

基調講演「世界文化遺産の保全四分野における新しい潮流—アジアの文化的ダイナミズムを考える」

New Trends in four fields of the conservation of the World Cultural Heritage

- *Considering Asian*

Cultural Dynamism

宗田好史（京都府立大学環境デザイン学科教授／日本イコモス理事）

午前10時30分

「アジアの町並み保存ネットワークと奈良まちづくりセンター」

Asian Network for Urban Conservation and Nara Machizukuri Center

岩井一郎（（社）奈良まちづくりセンター／日本）

午前10時45分 質疑応答

午前11時 お茶休憩

午前11時15分

「より力強い遺産保全運動への20年間」

Two decades toward a stronger heritage movement

カトリニ・プラティハリ・クボントゥブ（インドネシア・ヘリティジ・トラスト／インドネシア ジャカルタ）

Catrini Pratihari Kubontubuh, Indonesian Heritage Trust, Jakarta, Indonesia

午前11時35分

「タイ・イコモスと保全活動」

ICOMOS Thailand and the conservation activities

ヨングタニット・ピモンサティアン (タイ・イコモス)

Yongtanit Pimonsathean, ICOMOS Thailand

午前11時55分

「中国における地域開発と文化を中心とした都市再生の現状」

The current status of community development and culturally-led urban regeneration in China

龍元教授 (廈門・華僑大学／中華人民共和国)

Long Yuan, Huaqiao University, Xiamen, P.R. China

午後12時15分

「ヤンゴンの遺産保全：取り組みと課題」

Yangon Urban Heritage Conservation: Efforts and Challenges

モウ・モウ・ルウィン、チョウ・カリヤー (ヤンゴン・ヘリティジ・トラスト／ミャンマー)

Moe Moe Lwin and Chaw Kalyar, Yangon Heritage Trust, Myanmar

【29ページ】

午後12時35分 記念撮影

午後12時50分 昼食

午後1時45分

「バンダ・アチェと遺産保全運動－津波から8年が経過して」

Banda Aceh and Heritage Movements: 8 years after the Tsunami

イエニー・ラマヤティ (アチェ・ヘリティジ・コミュニティ基金／インドネシア)

Yenny Rahmayati, Aceh Heritage Community Foundation, Indonesia

午後2時5分

「プーケット旧市街に残るショップハウスの変わりゆく表情」

The Changing Faces of the Shophouses in Phuket Old Town

プラニー・サクルピパタナ (タイ・プラナカン協会／タイ)

Pranee Sakulpipatana, Thai Peranakan Association, Thailand

午後2時25分

「今井町重要伝統的建造物群保存地区の空き家活用に関する事例」

The cases of practical use of the vacant houses at the Imai Important Preservation District for Groups of Historic Buildings.

米村博昭 ((社) 奈良まちづくりセンター／日本)

午後2時45分

「プノンペンの開発と遺産保全の課題」

Phnom Penh Development and Heritage Conservation Challenge

ヤム・ソクリー（クメール建築ツアーズ／カンボジア プノンペン）

YAM Sokly, Khmer Architecture Tours, Phnom Penh, Cambodia

午後3時5分 お茶休憩

午後3時20分

「変わりゆく台北の歴史的地区—大稻埕の事例から」

Transforming Heritage District in Taipei - The Case Study of Dadaocheng

アリス・チウ（台湾歴史資源経理学会／台湾）

Alice Chiu, Institute of Historical Resources Management, Taiwan

午後3時40分

「クリエイティブ・アーバン・ソリューション・センター：チェンマイ学習センター」

Creative Urban Solutions Center: Chiangmai Learning Center

マニサワード・ジンタピタック、ヌタコルン・ヴィティタノン（UDIF／タイ チェンマイ）

Mrs. Manissaward Jintapitak and Mr. Nuttakorn Vititanon, UDIF, Chiangmai, Thailand

午後4時

「歴史的エリア奈良町—現状とNMCによる最新プロジェクトについて」

The historical city: Nara-machi - its current situation and NMC' s latest project

室雅博（（社）奈良まちづくりセンター／日本）

午後4時20分

「北村の都市開発の歴史と現状」

The urban development history of Bukchon Culture Forum and its current situation

イ・ジュヨン、イ・キュンタク（北村文化フォーラム／韓国 ソウル）

Joo-yeon Lee and Kyung-taek Lee, Bukchon Culture Forum Seoul, Korea

午後4時40分 質疑応答

午後5時 まとめ

午後5時10分 終了

2. ソーシャルネットワークによる発信

The image shows a screenshot of a Facebook page for the 'Asia Heritage Network'. The page header includes the Facebook logo, a search bar, and the user's name 'Ichiro Iwai'. The main content area features a post by 'Mark Lay' with a video link and a post by 'Bodhi Pop' with text about a conference. The left sidebar contains navigation options like 'News Feed', 'Messages', and 'Events'. The right sidebar shows 'Suggested Groups' and 'What should we post?'. The bottom of the page has a navigation bar with 'インターネット' (Internet).

facebook 2 1 1 Search for people, places and things Ichiro Iwai Find

Ichiro Iwai Edit Profile

FAVOURITES

- News Feed
- Messages
- Events
- Photos
- Facebook navi

CONNECT

- Find Friends
- Invite friends

GROUPS

- Asia Heritage Network
- Penang Heritage Tr... 20+
- Create Group...

APPS

- App Centre
- Find Friends
- Games Feed 3
- Gifts
- Links

PAGES

- Pages feed 20
- Like Pages 19
- Create a Page...

MORE

Friends on Chat

Asia Heritage Network About Events Photos Files

Write Post Add Photo / Video Ask Question Add File

Write something...

49 members · Mes... + Add people

RECENT POSTS

Mark Lay <http://www.youtube.com/watch?v=sAuukSWvpTk>

101 east - Restoring Rangoon www.youtube.com
Myanmar's former capital, Yangon, boasts one of the most spectacular early-20th century urban landscapes in Asia. A century ago the country's former capital ...

Like · Comment · Follow Post · Share · 7 July at 00:06

Sokly Yam likes this. ✓ Seen by 8

Write a comment...

Bodhi Pop CALL FOR SESSIONS/PAPERS

The National Marine Sanctuary Foundation and University of Hawaii welcome you to the Second Asia-Pacific regional conference on Underwater Cultural Heritage

- Date: 12-16 May 2014

What should we post? Add a description

Suggested Groups

- Masa Ho Shi friend...
- Penang Arts E...
- Peral Joann joined
- 善治i 項目 Eric Ye joined
- KuLiP MaSu 236 m...

Friend Chat

インターネット

3. 学会論文

アジアの町並み保存ネットワークとその未来

—歴史遺産、民族アイデンティティの継承、アジアのダイナミズム—

The Urban Conservation Network in Asia and its Future:

Heritage, Cultural Identities and Asian Dynamism

(社)奈良まちづくりセンター 黒田睦子

1) アジア・西太平洋都市保全ネットワークの結成から現在まで

(社)奈良まちづくりセンター(以下NMC)は近年、アジアの経済成長で再開発による都市化が進み、歴史的環境が失われる中、町並みや伝統的町家を保存しようとの海外民間組織の存在を知る。

1991年、笹川平和財団の助成により、海外のまちづくり団体との交流事業を推進。インドネシア、シンガポール、日本、台湾、タイ、ベトナム、オーストラリアなどのNGOによる「アジア・西太平洋都市保全ネットワーク Asia And West Pacific Network For Urban Conservation Inc. (AWPNUC)」を結成した。毎年、各国持ち廻りで都市保全をテーマに、国際シンポジウム開催を目的とする。理事会では、なぜ海外まで手を広げるのかと紛糾。一方、奈良町はアジアの一都市であり、地球市民時代のいま50年先、100年先の奈良を考えるためにとの意見が他を制した。

第1回は92年、マレーシアのペナン、第2回は93年、オーストラリアのアデレード、第3回は94年、ベトナムのハノイ、第4回は95年、日本の奈良町で3日間、「歴史的町並み・町家生活文化の未来への継承・発展」を開催し、11ヶ国・地域から39人、県民200人が参加。第5回は96年、インドネシアのジョクジャカルタ、第6回は97年、台湾の台北と順調に進むものの、マンパワーと財政面でやむなく休止。

03年、タイのチェンマイの歴史的景観保全に取り組む都市開発研究財団(UDIF)と交流を開始。04年、中国都市計画学会と中国武漢市の華中科技大学共催の国際会議「21世紀における中国の都市発展」への参加を契機に、中国との交流が始まる。05年、インド洋大津波の被災地であるインドネシアのアチェ復興支援のため、現地の歴史的遺産の復興に取り組むアチェ・ヘリテージ・コミュニティの活動支援を開始。

06年、マレーシア、ペナンにてペナン、アチェ、奈良によるアジア歴史都市トライアングル交流フォーラムを開催。08年、韓国のソウル北村地区の保存に取り組む北村文化フォーラムとの交流を開始。09年、中国の武漢市漢正街を調査、NMCと武漢大学共催でシンポジウム「武漢と奈良の都市の歴史性、非正規性の比較—都市の保全と再開発」を開催。10年、平城遷都1300年記念事業の一環として、アジア伝統的住まいパネル展「アジアの歴史都市と奈良の住まいと暮らし」と地域間国際交流フォーラム「市民が支えるアジアの多民族共生世界遺産—マレーシア・ペナン」、「韓国地区の町並み・伝統文化の継承を考える—韓国・ソウル・北村」を開催。11年、中国アモイの華僑大学主催「中日都市更新と歴史文化遺産」への参加。

20年間、町並み保存をキーワードに国境を越え、民族を超えたネットワークを拡大してきた。アジア大好き人間である数人の国際交流担当理事が長年積み重ねてきた友好と交流の軌跡である。

2) トヨタ財団助成「アジアの隣人たち～未来への展望」を受けて

主催・共催は、本年のトヨタ財団助成によりNMC主催、マレーシアのペナン・ヘリテージ・トラスト（以下PHT）共催による交流事業。PHTはペナンの歴史的町並みジョージタウンの保存を担うNGOで、84年結成。中国系、マレー系、インド系などの多民族共生の町並み保存を進め、無形生活文化財の保存にも取り組む。

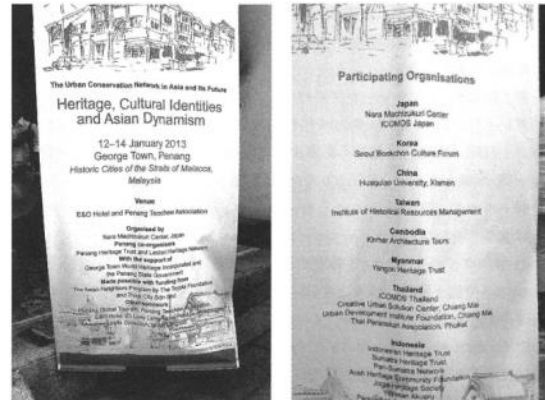
PHTの活動拠点はコロニアル・スタイルのショップハウスの利活用だが、その事例を学んだNMCは95年、伝統的町家の再生活用の活動拠点「奈良町物語館」を開館した。開催テーマは、「アジアの町並み保存ネットワークとその未来—歴史遺産、民族アイデンティティの継承、アジアのダイナミズム」

開催趣旨は、アジアの経済発展の陰で、中国やインドを中心に数千年にわたる歴史都市の町並みは危機に瀕している。近い将来、多くのアジアの都市は無機質で個性の無い都市景観を呈すようになるだろう。歴史的町並みと共に、そこで営まれてきた生活者のコミュニティや無形的生活文化も失われつつある。アジアのダイナミズムのもと、それらを保存し、継承することが急務である。地域ごとの民族的、文化的アイデンティティを回復し、個性豊かな都市空間を再現することが課題である。

今回、アジアの歴史都市において、町並み・歴史遺産の保存に取り組むNGO組織が一堂に会し、市民レベルで歴史的町並みとそこで営まれるコミュニティをいかに継承するか、アジアの町並み保存の未来像はいかにあるべきか、NGO組織間のネットワークの必要性などについて議論する。

開催日程は、2013年1月12～14の3日間

初日はペナン市内のフィールドワーク。コロニアルスタイルの職住一体のショップハウスが軒を連ねる町並みは98年、世界遺産に登録された。常夏の地であっても、自動販売機は見当たらない。2日目は宗田好史・日本イコモス委員・京都府立大学教授の基調講演「世界文化遺産の保護活動における4分野の新たな潮流—アジアの文化的ダイナミズムからの考察」。120名の参加者は連日、早朝から発表やディスカッションで盛り上がる。各国の発表は若い女性の活躍が目覚ましく、同じ悩



看板1

看板2



PHTの事務所

みや課題を共有。PHTの大勢の若者が会場運営に走り廻り、各発表の持時間15分は厳しく管理される。懇親会はペナン州首席大臣が挨拶。每晚続いた交流会では多くの出会いと同じ目標に挑戦するNGO同志の意見交換が飛び交った。

開催場所は、マレーシア・ペナン・ジョージタウン。マレーシアは日本より一回り小さい国土で、20世紀初頭のイギリス植民地時代の面影を色濃く残す町並み。第2次世界大戦で日本軍が占領して戦後、独立。ペナンは人口70万、08年に世界遺産に登録された。

参加団体は、20団体(9ヶ国・地域、参加人数120名)

- ① 大韓民国 北村文化フォーラム
- ② 中華人民共和国 華僑大学(龍元教授)
- ③ 台湾 台湾歴史資源経理学会
- ④ カンボジア王国
クメール・建築ツアーズ
- ⑤ ミャンマー連邦共和国
ヤンゴン・ヘリテージ・トラスト
- ⑥ タイ王国
チェンマイ・都市開発研究財団
タイ・イコモス(国際記念物遺跡会議)
クリエイティブ・アーバン・ソリューション・センター
プーケット・コミュニティ基金
- ⑦ インドネシア共和国
インドネシア・ナショナル・ヘリテージ・トラスト
アチェ・ヘリテージ・コミュニティ基金
バダ・ワリサン・スマトラ
汎スマトラ・ネットワーク
ジョグジャ・ヘリテージ・ソサイエティ
パグユバン・カク&ニング・スラバヤ
- ⑧ マレーシア
レスタリ・ヘリテージ・ネットワーク
ペナン・ヘリテージ・トラスト
ジョージタウン世界遺産法人
ペラック・ヘリテージ・ソサイエティ
- ⑨ 日本 (社)奈良まちづくりセンター



潮集會館での集合写真



シンポジウム会場

ミャンマー連邦共和国の設立間もないヤンゴン・ヘリテージ・トラスト(以下YHT)の特別招聘を目的に11月下旬、NMCはミャンマーへヒアリングに赴く。アウンサンスーチ女史が軟禁を解かれて選挙に当選し、軍事政権から民主化への道を歩む。かつての首都ヤンゴンはイギリスの植民

地であり、第2次世界大戦後にビルマとして独立、2千年の歴史がある。伝統的建造物のパゴダや独特の町並みが残るが公共水道、下水道、上水道も不十分で、都市計画法、建築基準法も機能していない。昨今、日本はヤンゴン南東部に経済特区を開発と発表。開発ブームが建築遺産を脅かす昨今、YHTは歴史的建造物を発掘し、リストの作成を進める。NMCは歴史遺産が多く残るヤンゴンの支援を模索している。

日本居住福祉学会は12年、開催予定の第11回日中韓居住問題国際会議・神戸大会が中国の不参加で延期になり、ペナン会議への招聘国中国が参加可能かの懸念もあったが、学会会員の龍元・華僑大学建築学院教授は支障なく参加した。

以下は龍氏の報告要旨である。

3)「中国におけるコミュニティの現状と文化型の都市更新～上海・田子坊地区を事例として」

中国で最も身近な自治体は「社区(コミュニティ)」と呼ばれる。正式な制度として、その上に市、区、街道委員会があり、全体的に4段階管理となる。コミュニティは理論的に自治組織であるが、現実として政府の仕事を支持しなければならないというジレンマがある。また、コミュニティ・リーダーは住民の選挙で決められるものの、共産党コミュニティ支部の書記に任命され、兼務も少なくない。一党統治により、市民社会の台頭とコミュニティ発展への道は遠い。

しかしコミュニティが全く役割を果たせないわけではない。中国上海の事例として、旧フランス租界の田子坊は7.2haのエリアの中、約1,500戸の住居があり、石庫門(上海里弄)の集合住宅、伝統的な四合院の屋敷、一戸建て住宅、近代化遺産の工場など多様な建築スタイルが混在し、昔の風情が漂う。

上海 田子坊の「文化創造産業区」(龍元 資料)



田子坊は中国における都市更新の画期的なモデルといえる。著名な芸術家や地元住民、地域の街道委員会リーダーが不動産向けの大開発案をストップさせ、地元大学建築家や都市計画家、文化人や商店会などが連携して保護区「文化創造産業区」を成功させた。歴史的環境の保全だけでなく、コミュニティの未来へ向けて、古い町並みの新しい価値創出事例として重要である。結論として市、区政府が地元の声を聞き、トップダウンの都市マスタープランを放棄する柔軟性、コミュニティ主導による政府とのパートナーシップ、市民リーダーの存在、そして政府、企業、市民の三者一体の協働整備などが、中国における体制打破と市民参加への大前提になる。

4) Asia Heritage Network が誕生

今回のシンポジウムを通して、NGO組織の相互の連携を構築するため、全員の合意により、新たな Asia Heritage Network(AHN)が発足した。アジアの伝統的町並みに共通する価値の再確認と新たな都市保存戦略を構築し、課題や提案を世界に発信する目的がある。

宣言文の締結へ向けても議論が交わされたが未完である。

日韓、日中など、アジアの国家間には歴史的認識の差異や領土問題など困難な課題が山積する。現に日中両国の主権争いは不毛であり、世界の重要課題として、2国間の関係改善が求められる。

町並保存を初めとする様々な市民ネットワークの絆が、相互の友好や理解を深め、政府間の緊張緩和、ひいてはアジアの平和的未来にも寄与するとの思いがある。

21世紀はアジアの時代であり、市民レベルの経験交流をさらに深め、アジアにおける歴史都市の持続的な発展を期待したい。

4. 新聞記事

朝日新聞（奈良版） 2013年（平成25年）1月10日（木）

アジアの町並み保存探る
マレーシアで国際シンポ

奈良市の旧市街地「奈良町」などで町並み保存の活動を続ける奈良まちづくりセンター（室雅博理事長）が12〜14日、マレーシアのペナン島でアジアの歴史的町並み保存の未来像を探る国際シンポジウムを開く。

日中韓や東南アジアなどで活動する10カ国・地域のNGO（非政府組織）のメンバーが集まり、アジアの歴史都市の持続的な発展を目指す提言を行う予定だ。

センターは、県内の町並み保存のほか、1991年

からペナン島やタイ・チェンマイ、インドネシア・アチェなどへも活動圏を広げ、同じ志を持つNGOなどへの支援や交流を続けてきた。

近年、経済成長が著しいアジア各地では都市中心部で大規模な再開発が進み、歴史ある貴重な町並みが取り壊されるケースが多く報告されている。歴史性や地

域性が乏しい画一的な町づくりが進むとの危機感が強まっている。

国際シンポは、英国統治時代の町並みが世界遺産に登録されたペナン島のジョージタウンに、プータンやミヤンマー、カンボジア、インドネシア、中国、韓国、台湾など計10カ国・地域から計19団体を集めて開催。「アジアの町並み保存

ネットワークとその未来」と題し、歴史遺産である町並みと住民のコミュニティをいかに継承するのかなどを議論する。「アジアの歴史都市まちづくり宣言」（仮称）も採択する予定。

センターの米村博昭理事は「今回、町並み保存に取り組み始めたばかりのグループも参加する。経験を相互に伝え合って草の根の交

流を深め、勇気づけたい」と話している。（塚本和心）

2012年度アジア隣人プログラム 報告書
アジアの町並み保存ネットワークとその未来
—歴史遺産、民族アイデンティティの継承、アジアのダイナミズム—
(禁 無断掲載)

2013年10月発行

社団法人 奈良まちづくりセンター

〒630-8333 奈良市中新屋町2-1

Tel. 0742-26-3476

E-mail nmc@m4.kcn.ne.jp

編集 岩井一郎、長谷川徹、藤野正文

協力 ペナン・ヘリテージ・トラスト、レスタリ・ヘリテージ・ネットワーク

翻訳協力 齋藤啓

この報告書は、公益財団法人トヨタ財団2012年度アジア隣人プログラムの助成を受けて行った事業の成果を取りまとめたものです。